

史料に見る 芝浦工業大学





80年の歳月を越えて語りかけてくるもの

～本学草創期の教育を映し出す貴重な写真を発掘～

電球の薄明りの下、粗末な机と椅子が所狭しと並んだ教室に端座し、面を上げ、一心に食い入るように前を見据えた学生たち。詰め襟の学生服に交じって背広にネクタイ姿の人たちもいる。年齢に幅のあることが見てとれる。学生たちの息吹がひしひしと伝わってくる。教場に張り詰める、りんとした「向学の気」に圧倒される。

この一葉の写真が収められているのは「東京高等工商学校第壱回建築工学科卒業記念写真帖」、1929年3月に刊行されたものである。工業の振興のため、中堅技術者の育成が急がれており、先生も学生も社会の要請に応えようと懸命だった時代。写真は本学草創期の授業風景を映し出すにとどまらな

い、その時代の教育の姿をも生き生きと伝えてくれる。

巻末の住所録「郷閩録」を見ると、建築工学科(夜間部)第1期生40名の出身地は北海道から鹿児島まで全土にわたる。「朝鮮平安南道……」という地名も見出される。全国型の大学を旗印に発展してきた本学は、前身の東京高等工商学校創設当初より学生たちが津々浦々から集う学び舎であった。

1927年の創立から80年、記念すべき年の幕開けに「温故知新」、脈々と受け継がれてきた本学の教育の来し方行く末に思いをめぐらせたい。疾風怒濤の時代、内外とも変転めまぐるしいが、本学が理想として目指す教育は不変であろう。この写真が私たちに語りかけてくるものを大切にしたい。

まえがき

上に掲げた写真は、芝浦工業大学の源、東京高等工商学校の建築工学科(夜間部)第1期生の授業風景。宗教画の趣があると評した人もいる。芝浦工業大学の広報誌『S.I.T. BULLETIN』2007年1月号巻頭に見開きで解説文とともに掲載された。

東京高等工商学校は1927(昭和2)年に、有元史郎によって創設された。2007年は創立80周年に当たる。記念すべき年の幕開けに、見つかったばかりのこの写真は自ら日の目を見ただけでなく、同誌の編集に新たな着想をもたらした。

80周年を記念した取り組みとして、芝浦の学園に集った人たちの営みを史実に基づいてエッセー風に描く連載企画が広報課の会議で提案され、採用された。2007年2月号掲載の「幻の50年史」を皮切りに、「史料に見る芝浦工業大学」のシリーズが始まった。

折々に広報課外に執筆者を求めた。その寄稿を交えながら連載は回を重ね、2012年3月号で第50回の節目を迎えた。抜き刷りにして1冊の本にまとめてはどうかという声が上がリ、刊行の運びとなった。

収められた50編は、第1回から50回まで、順番もデザインやレイアウトも、ほぼ元通りに再現したものである。掲載号それぞれの趣向も味わってくださると、ありがたい。

目次

2006～2011年度

80年の歳月を越えて語りかけてくるもの 02
～本学草創期の教育を映し出す貴重な写真を発掘～

まえがき

目次 03

2006年度

- ① 幻の50年史 (2007年2月号) 04
- ② 学業半ばにして (2007年3月号) 05

2007年度

- ③ 東京高等工学校土木学科長
宮本武之輔と日本の技術者運動 (2007年4月号) 06
- ④ 師弟の純情 一に依りて (2007年5月号) 07
- ⑤ 草創期の「学課担任表」から見える
有元流工業教育の片鱗 (2007年6月号) 08
- ⑥ 芝浦工業大学、「優秀なる技術者の育成」を
掲げ続けて (2007年7月号) 10
- ⑦ 鉄中・育英と連なる芝浦の史脈 (2007年8・9月号) 11
- ⑧ 大森校舎は何処に (2008年1月号) 12
- ⑨ 八周年記念祭 (2008年2月号) 13
- ⑩ われらが工学 英気鍾む (2008年3月号) 14

2008年度

- ⑪ 大宮校舎の開設 (2008年4月号) 15
- ⑫ 満年齢と数え年 (2008年5月号) 16
- ⑬ 栄光の芝浦工大ハンドボール部 (2008年6月号) 17
- ⑭ 恩師 弓削政隆先生を偲ぶ (2008年7月号) 18
- ⑮ 文化人 齋藤雄三先生と
機械工学第二学科の誕生 (2008年8・9月号) 19
- ⑯ 芝浦工業短期大学の存在意義 (2008年10月号) 20
- ⑰ 誇り高き芝浦工大韓国同窓会 (2008年11・12月号) 21
- ⑱ 柏の青春 毎日が喜び (2009年1月号) 22
- ⑲ 財団法人から学校法人芝浦学園に (2009年2月号) 23
- ⑳ 望郷の湯の丸高原寮 (2009年3月号) 24

2009年度

- ㉑ 燃えさかる炎から芝浦を
守ろうとして (2009年4月号) 25
- ㉒ 懸け橋となった付属第一高等学校 (2009年5月号) 26
- ㉓ 旧芝浦校舎の上棟札 (2009年6月号) 27
- ㉔ ロボットセミナーの歩んできた道 (2009年7月号) 28

- ㉕ ガリ版刷りの卒業証書 (2009年8・9月号) 29
- ㉖ 工学部二部の軌跡 (2009年10月号) 30
- ㉗ シバヤから芝屋にかく生まれ、
かく来たる30年 (2009年11・12月号) 31
- ㉘ 芝浦工大初の理事長にして最後の東京市長
陸軍大将 岸本綾夫 (2010年1月号) 32
- ㉙ 学風三則 (2010年2月号) 33
- ㉚ 校歌は世につれ (2010年3月号) 34

2010年度

- ㉛ 大空かける夢、振るう熱弁
青春の華を見た部活動 (2010年4・5月号) 35
- ㉜ 手書きの科目配当表 (2010年6月号) 36
- ㉝ 口伝えの芝浦節 —スキューバダイビング部の
不易流行 (2010年7月号) 37
- ㉞ 芝浦工大発祥の地
大森校舎の所在 (2010年8・9月号) 38
- ㉟ 伝統の地に建つ芝浦校舎 (2010年10月号) 39
- ㊱ 本を通して伝わること、伝えること (2010年11月号) 40
- ㊲ 東京高等工商学校 初代建築学科長 大澤三之助
～伝統の空間を近代に再興～ (2010年12月号) 41
- ㊳ 建学の精神 社会に学び、
社会に貢献する技術者の育成 (2011年1月号) 42
- ㊴ 青春の熱情を結実したギター演奏会 (2011年2月号) 43
- ㊵ 昭和28年度入学志願要項 (2011年3月号) 44

2011年度

- ㊶ 初めて入学した女子学生 (2011年4・5月号) 45
- ㊷ 前代未聞! 大宮図書館設計コンペで教授と学生が一騎討ち
「芝浦の施設は芝浦人の設計で!」の原点 (2011年6月号) 46
- ㊸ メートル法推進に尽力した
初代学長 松縄信太 (2011年7月号) 47
- ㊹ 「システム工学部」開設 (2011年8・9月号) 48
- ㊺ 創部の想いを後代に (2011年10月号) 49
- ㊻ 東都大学野球一部リーグ 初優勝 (2011年11月号) 50
- ㊼ 母校に送ったエール (2011年12月号) 51
- ㊽ 南極に渡った志 宇宙へ馳せた夢 (2012年1月号) 52
- ㊾ 同じ釜の飯を食った寮生仲間 (2012年2月号) 53
- ㊿ 奇しくもハイジャック機に
乗り合わせた同窓クルー (2012年3月号) 54

あとがき 奥付 55

[2007年2月号]

史料に見る芝浦工業大学 1

幻の50年史

80th
Anniversary 2007

昨秋始動した「歴史資料整理ワーキンググループ」は、校史編纂の基礎を固めるため、本学に現存する歴史的な資料の整理に取り組んでいる。これまで3ヶ月余の作業を通して見えてきたことの一つをお伝えしたい。

本学の歴史を記録し、校史として編むことに法人として初めて本格的に取り組んだのは50年史と思われる。その取り組みを伝える貴重な史料が『50年史編纂ニュース』(各号ともB5版、4頁)である。創刊号は1977年1月31日に発行された。同年3月には第2号が、5月には第3号が出された。1年余りを経て1978年7月10日に第4号が出ているが、後に続く号は見当たらない。

発行は「学校法人芝浦工業大学校史編纂委員会」の手になる。50年史編纂の目的を「現在・未来に向けて継承すべき、またはさらに形成すべき価値ある伝統をあるいはその核を、発見・確認するための基礎を客観的に整える」(編纂ニュース第2号)としている。1976年6月1日付で10名の委員が発令された。実務の主要な担い手だったのが芝浦工業短期大学(1983年廃止)の故内藤英夫助教授。後に彼は芝浦工業大学柏高校の開設(1980年開校)にも尽力したが、その創立10周年記念誌『十年の歩み』で次のように述べている。

昭和51年の暮れに近いころだったろうか。(中略)当時、校史編纂委員として「芝浦五十年の歩み」を担当していたのだが、半世紀を経た学園の創立者が誰なの



50年史編纂ニュース

かを知る者は少なかったのである。

創立者、有元史郎のことが知られてなかっただけでなく、本学の歴史そのものに光が当たっていなかった時代、校史編纂を担当する者は暗中模索を強いられた。委員会の手がけたことは、史資料の収集と年表の作成、さらに卒業生の座談会や聴き取りの実施、創立者の伝記の入手、公文書の発掘等々、多岐にわたる。が、校史の制作には10年の歴史に対して1年の時間を要すると言われる。1977年11月4日、創立50周年の記念式典に間に合わせることができたのは年表『50年のあゆみ』(B5版、32頁)である。その巻頭言「創立50周年記念日の意義」の文中、三浦元秀理事長(当時)は、「本日を期して正式に“50年史編纂”にとりかかることにいたします」と言明している。

残念ながら、50年史は誕生しなかった。学園闘争の混乱が尾を引いて学内は落ち着いておらず、校史編纂に傾ける余力もなかったと見る。ただ、その後、60周年、70周年の折に発行された年表『あゆみ』は50周年のそれを伝承し、体裁も同様である。世移り人去り、校史は現在に至るも実現していないが、周年毎に発行された記念誌の制作でも素地となったのがこの年表である。悔やまれるのは50年史編纂の取り組みで収集された資料の多くが散逸したことである。今年、80周年を機に史料の収集を急ぎ、保管体制を整えることが課題となっている。



50年のあゆみ

[2007年3月号]

史料に見る芝浦工業大学 2

80th
Anniversary 2007

学業半ばにして

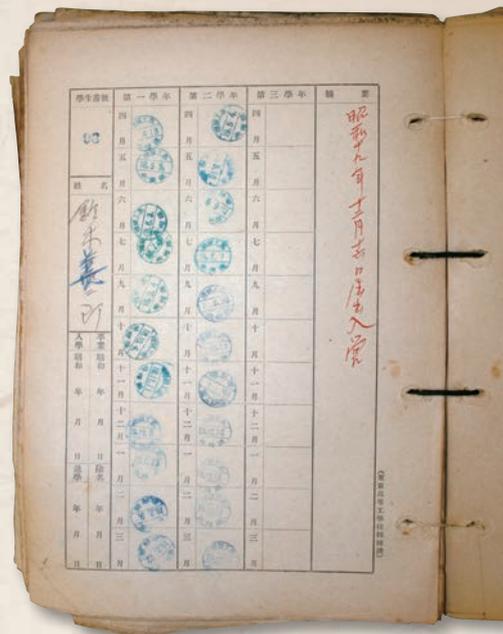
財務課が保管する書類の中に、芝浦工大の前身、東京高等工学校の「学費納入原簿」がある。1943（昭和18）年4月入学者のそれに目を通す機会を得た。在籍した学生の一覧表、大部分の氏名には赤い線が引かれてある。そこかしこ、名前の横に「退」あるいは「退学」と赤く走り書きされている。「入営」あるいは「応召」という赤い文字も散見される。

右の写真は機械工学科夜間部一学生の原簿である。右下には当時の担当部署名が経理課と記されてある。在籍すべき3年間の月毎に学費の領収印欄がある。彼の学費納入は1943年4月13日の第一学年4月分始まり、第二学年12～3月の4カ月分を1944年12月16日に納めて終わっている。最後の年、第三学年はすべての月が空欄である。摘要欄には「昭和19年12月16日届出入営」と朱筆が入っている。

太平洋戦争末期、戦局の悪化とともに、1943年12月、それまでの20才から19才に徴兵年令が引き下げられた。その翌年にも兵役法施行規則が改められ、満17才以上の者とすると同時に17才未満の者の志願も可とした。敗色濃くなる中、1943年6月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が、翌年2月には「決戦非常措置要綱」が閣議決定され、本格的な学徒の戦時動員の実施、勤労働員も通年の体制に入る。本学でも1930年代後半から、普通教育や職業教育の他に軍事教育



軍事教練を受ける学生たち



東京高等工学校「学費納入原簿」

が積極的に行われていた。学生達は厳しい軍事教練や勤労奉仕に従事した。

今年83歳、本学校友会の東京・城東支部長の山下市太郎さんは1943年3月に東京高等工学校機械工学科夜間部を2年で終え、卒業した。当時の学校の様子を知る一人である。彼は在学中に横須賀海軍工廠^{こうしょう}水雷製造所に徴用されており、東京高等工学校の卒業式はそこでの勤務のため欠席したとのことである。同級生には30歳代、妻子のある者もいた。その中に、いったんは徴兵検査で不合格となり、兵役免除となって、向学の念から本学に入学したものの、繰り上げ卒業をやむなくされ、徴兵令を受けた者もいたという。

平成の今、学位記授与式に臨む学生たちの表情は晴れやかである。戦時下、「学費納入原簿」の一覧表で氏名に赤線を付された方々、学業半ばにして学び舎を去り、戦地へ越いた声なき語り部たちの胸中を察して余りある。

史料に見る芝浦工業大学 3

本年2月号より連載。3回目は本学歴史資料整理ワーキンググループ委員、宇都宮大学教育学部准教授の丸山剛史先生からの寄稿です。

80th
Anniversary 2007

東京高等工学校土木工学科長 宮本武之輔と 日本の技術者運動

皆さんは、宮本武之輔（みやもと・たけのすけ、1892～1941）という人物をご存じだろうか？ 宮本は、第二次大戦前の日本で技術者の地位向上を求めて技術者運動に尽力した人物であり、そのリーダーであった。戦前の日本では、文官任用令のもとで帝国大学出身者であつても理工系出身者は冷遇（例、昇進）される傾向があつた。こうした状況下で技術者の地位向上運動にのりだしたのが東京帝国大学工科大学土木工学科出身で内務省土木技師であつた宮本であつた。歴史資料整理ワーキンググループの調査により、この宮本が芝浦工業大学の前身である東京高等工学校土木工学科長を務めていたことがわかつてきた。

宮本は、1932（昭和7）年頃から東京高等工学校と関係をもつようになったとされる⁽¹⁾。49歳という若さで逝去するまで勤務したようである。大正から昭和戦前期にかけては、技術者地位向上運動がおこり、運動が昂



揚した時期であつた。1918（大正7）年に、文官任用令体制の克服を求める技術者の運動団体として、工政会が組織され、日本における技術者の地位向上運動が形成されつつあつた。工政会は、工学会、機械学会、建築学会、工業化学会、造船協会、鉄鋼協会、電気学会、土木学会など、14団体の役員レベルの技術者たちを中核的な指導者とする運動団体であつた。1920（大正9）年には、東京帝大土木工学科卒業の30歳前後の技術者により、日本工人倶楽部が組織され、技術者の地位向上運動が本格化した⁽²⁾。宮本は、この団体の中心人物であつた。こうした宮本らの取り組みにより、その後、技術者の冷遇は改善されていった。

現在、宮本と本学との関係をさらに調査している。彼が亡くなる直前まで記していた日記は、その写真版印刷が刊行されており、本学豊洲校舎図書館にも所蔵されている。

このように、技術者の地位向上に尽力し、日本の歴史に名前を残した人物が本学の教員として勤めていたことは、もっと知られてよいように思われる。



宮本武之輔の著書
（本学図書館所蔵）

注. (1) 宮本武之輔「故有元校長の思出」松尾小三郎編「故有元史郎伝」、1940年、242ページ。／(2) 大淀昇一「宮本武之輔と科学技術行政」東海大学出版会、1989年、103～128ページ。大淀の著書には、その他に「技術官僚の政治参画——日本の科学技術行政の幕開き——」（中央公論社、1997年）がある。

80th Anniversary 2007

師弟の純情 いつ 一に依りて

歴史資料整理ワーキンググループに卒業生から本学に関わる貴重な史資料が寄せられている。その一つに、横浜市港北区新羽町在住の長谷川武明さん（1965年大学院金属工学専攻修了。本学には助手としても勤務）のがある。縄文時代からの新羽の郷土史『新羽史』、長谷川さんはその編集代表である。学部（二部機械工学科）在学時、英語を教わった先生との出会いを大切に思い続けている。

小田島雄志（おだしま ゆうし）さん、シェイクスピアの全戯曲を翻訳した英文学者、演劇評論家。文化功労者、東京大学名誉教授、東京芸術劇場館長でもある。シェイクスピアの魅力を、温蓄を傾け、当意即妙の語り口で伝えてくれる。その気さくな人柄から請われてテレビのバラエティー番組に出演したこともある。

著書『半自伝 このままでいいのか、いけないのか』（白水社刊）に芝浦工大で教えていた当時（1956年4月～1959年3月）、生活苦の日々をつづったところがある。本学を始め、数校の非常勤講師として授業を担当していた。曜日によっては掛けもちが重なり、朝8時半から夜9時まで働きづめということもあったと書かれてある。

今やシェイクスピア研究の泰斗である小田島さんが、20代後半、工学単科の本学で教えていたことは興味深い。小田島さんも長谷川さんも同じ年に本学に入った。ある日の授業の開始時、小田島さんは教室に入るなり、奨



『新羽史』（本学図書館所蔵）

学金の受給が決まった学生一人ひとりに「おめでとう」と声をかけたという。この先生はただ者ではない、長谷川さんにとって印象深く残っている思い出の一コマである。

下の写真、右側は担当の英語の授業で使用されたテキスト、S・モームの“COSMOPOLITANS”である。半世紀も前、長谷川さんの心をとらえた言葉がテキストの随所に書き込まれてある。テキストの内容から離れては恋愛論、文学論に遊び、シャンソンの一節を紹介し、芝居の魅力を熱っぽく語りかける授業だった。

芝浦工大を去って45年、小田島さんは教え子である長谷川さんの求めに応じて『新羽史』発刊に次のような言葉を寄せた。

新羽とは鶴見川でつながる細い縁でしかないのに、それでもぼくはこの本にあるなつかしさを覚えたのである、ふしぎなこと。

それはおそらく、新羽の歴史に四方八方から切り込んでいく著者たちのペンに、ふるさとへの愛がこめられていたからである。ふるさとを知ることは自分を知ることであり、過去を大切にすることは未来を大切にすることである、と改めて教えられた思いである。

表題は本学校歌2番の一節である。北原白秋の作詞は、教育の場はかくあるべしと期待、願望を込めたものだったか。それとも、草創期の芝浦工大の教育に既にしてあったところを感受して詠ったのだろうか。学生と教職員が心通わせ、学業や課外の活動で、教え、教えられ、学びあう関係が心地よく表現されている。



小田島さんの著書(左)と授業で使われたテキスト(右)

草創期の「学課担任表」から見える 有元流工業教育の片鱗

2007年度



本学は1927年、有元史郎先生が設立した東京高等工商学校(以下、東京高工と略す)を前身として、今年で80年の歴史がある。しかし創立当時の具体的な教育内容は確かではない。昨暮、はからずも東京高工の1933年前後と判断される「各科学課担任表」(以下、担任表と略す)なる一枚の紙を入手することができた。今回はこの担任表からカリキュラムを中心として、当時の東京高工の在りし姿の一端を推定することを試みた。

➤ の担任表とは土木、電気、建築、機械の4学科延べ144に及ぶ課目と、その担任教員(簡単な略歴つき)が各学科ごとに列記されている古紙である。

最初に校長・学科長から見てみよう。校長は名井九介工学博士で、土木学会長を勤めた勅任技師。建築学科長は大澤三之助工学博士で、日本建築の第一人者(東京美術学校教授)。土木工学科長は宮本武之輔工学博士で、内務省技師だが技術者地位向上に貢献してきた方。電気工学科長は福田勝工学博士で、東京工大教授。機械工学科長は松縄信太工学博士で、鉄道研究所長、機械学会長などを歴任(後には本学の学長・理事長として戦後の復興をなし遂げ、本学の中興の祖といわれた方)。

➤ のような錚々たる先生方がキャップであれば、学内の統率はもとより、社会的にも信頼を高めたことであろう。若き有元先生が、よくこれだけの陣容を整えられたと感心する。

さらに担任表を見ると、すべての学科の巻頭課目が「倫理学」になっているのは、工業学校としては特異である。それは予てより有元先生が工業界における道徳を非常に重視していたからであろう。東京高工の教育目的にも「…徳性の涵養に努める」とある。また先生には13章からなる「工業道徳」の著作(1937年)があるところからも、今日でいう「工業倫理」の重要性を昭和初期に見抜いていたことになろう。

全学科共通科目に「工業衛生」という聞き慣れない課目が目に入った。今でいう「安全工学」または「産業医学」に類する課目と理解するが、昭和初期に工業界での安全や職業病などを配慮した講義が行われていたことには驚いた。担任教員も医学博士で法学士という理想的な人選であった。もしこの講義が普及していたら、水俣病、四日市ぜんそくやアスベスト問題なども回避できたかもしれない。恐らくこの講義の発案も有元先生ではあるまいか。

次に、どの課目も複数の教員で担任されていることを発見した。専門科目であれば、大学教員と技師との組み合わせ、「法制」という課目であれば、元検事と弁護士といった具合である。同じ講義を異なった立場の教員から教えられるのは、物事の表裏がわかり、卓越した授業システムであろう。

語学にも重点が置かれ、英語教員は2名とも留学生、独逸語担当は1名で東京外語出身、工業英語にも3名の米国工学士が

80th Anniversary 2007



各科学課担任表

含まれている。そのほか、MIT、イリノイ、コロンビア、ボストン工科、パリなどの諸大学卒業の教員が専門科目を教えている。昭和初期の各種学校としては豪華メンバーであろう。

個々に探せば、各分野で著名な教員が相当いるはずである。たとえば建築構造の小野薫東京帝大教授、耐震・防火建築に詳しい藤田金一郎氏(大蔵省技師)、冷蔵工学の大家の長野悌介氏(三菱商事技師)、水力発電の最先端を知る元黒部川水電の豊村忠四郎技師長(米国工学士)、MITで電動車制御を学び、1935年前後から専門を工業経営学に転向し初代の工業経営学会長となった上田輝雄早稲田大教授、図学の決定版ともいわれる著作を行った図師督氏(東京府技師)などに目が着く。

そのような当代一流の教員を揃えた東京高工は、専門学校はおろか大学にも匹敵する教育をしていたようだ。当時は不況の時代であったが、東京高工には毎日昼夜合わせて数千の生徒が集まっていたという話が残っている。もし前述のような各種の風評が広がっていたとすれば、この話もあながちウソでもなさそうに思えてきた。

また一方では、「専門学校の教育期間と同じ3年でありながら、資格の得られない各種学校では不当だ」と生徒から専門学校昇格への強い要求があり、それに頑として応じない有元先生と大きなトラブルとなっていた。先生には実力さえあれば社会は認めてくれるはずだ、という信念があったと思われる。私が何人かの卒業生に

聞いたところでは「会社で特に差別は感じなかったし、他校卒業生の知らない新しい知識をもっていたので、むしろ誇りに思っていたから私達は常に母校に感謝の念をもっていた」、「仕事ができれば大丈夫だ」などと案外明るい答えが多かったように憶えている。

ところが最近、その「証」が発掘された。それは1930年版の「帝都学校総覧」の東京高工の頁に「本校の卒業生は国公立高等工業学校と同格の待遇を受く」と述べられていたのである。卒業生の答は間違っていないようだ。これは有元先生の考案した「有元流工業教育システム」と生徒の真面目さが共鳴して、社会の評価が得られたのではないかと推定している。

本校にとって得がたい資料「各科学課担任表」の入手と、1930年版「帝都学校総覧」の調査をしてくださった、宇都宮大学教育学部、丸山剛史准教授(本学歴史資料整理ワーキンググループ委員)に、最後になりましたが、心より感謝申し上げます。

*「学課担任表」の全体詳細は、下記URLでご覧いただけます。
URL: <http://www.shibaura-it.ac.jp/pr/chronicle/index.html>

芝浦工業大学、 「優秀なる技術者の育成」を 掲げ続けて

80th Anniversary 2007

1949年の新制大学発足時から、大学の目的規定に「優秀なる技術者の育成」を掲げ続けてきた工学の単科大学は、本学以外に存在しないことを知っている人は少ない。本学の「建学の精神」、技術者教育の歴史における本学の位置付けにかかわることであるので、教職員ならびに学生の皆さんは、ぜひ知っておいてほしい。

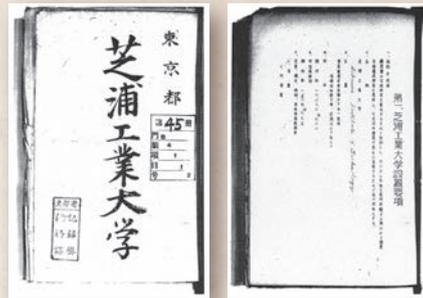
右に掲げた資料は、国立公文書館に所蔵されている本学の設置認可書類をとじた簿冊の表紙ならびに「設置要項」の写しである。また、この設置認可書類には「芝浦工業大学学則」も収録されており、大学設置時に芝浦工業大学が、どのような目的を掲げて出発しようとしたかがわかる。

これらの書類を見ると、本学は大学発足時から優秀なる「技術者」の育成を目的として掲げていたことがわかる。「芝浦工業大学設置要項」の「一、目的及使命」では、「芝浦工業大学」設置の目的が次のように記されている。

「識見豊かな技術者を養生するを以て目的とし、^{なが}学び乍ら学理を応用研鑽する事により優秀なる指導技術者を育成し、文化日本建設の為に貢献するを以て其の使命とする。」(下線、筆者)

また、「芝浦工業大学学則」の第一条では、大学の目的が次のように記されている。

「本学は教育基本法並びに学校教育法に則り学術の中



心として深く工学の研究を行い世界文化に貢献し、併せて広く一般の学術教養と専門の工業教育を施す事に依り、学生をして人格を陶冶し学理を究めしめ、体位の向上を計り、以て優秀なる技術者を育成する事を目的とする。而してその実践と応用に依り将来工業界の指導者たらしむる事を使命とする。」(下線、筆者)

同時期に発足した工学の単科大学として、武蔵工業大学、東京電機大学、工学院大学、大阪工業大学、千葉工業大学がある。しかし、これらの大学で大学の目的規定に「技術者」の「育成」を掲げているところはない(各大学の設置時の学則参照)。上記の「芝浦工業大学学則」の目的規定は、現在もほぼそのまま堅持されている。

技術者教育が注目されている現在、芝浦工業大学が大学発足時から、大学の目的規定に優秀なる「技術者」の育成を掲げ続けてきたことは関係者にもっと知られてよいように思われる。

■ INFORMATION 創立80周年記念事業各種イベント

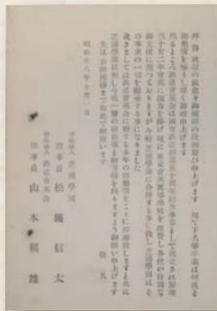
- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 小学生ロボットセミナー in 芝浦工大中高2007
日時:7月21日(土)・22日(日)・23日(月)・24日(火)・28日(土)
会場:板橋校舎・豊洲校舎 | <input type="checkbox"/> 少年少女ロボットセミナー in 富山2007
日時:9月8日(土)・9日(日)・15日(土)
会場:富山市民プラザ(アトリウム) |
| <input type="checkbox"/> 地域フォーラム2007 一富山一
テーマ「ロボットを用いた科学教育に関するシンポジウム」
日時:9月15日(土) 13:30～
会場:富山市民プラザ(アンサンブルホール) | <input type="checkbox"/> 地域フォーラム2007 一東京一
テーマ「共生と調和 ～国境を越えてはばたく芝浦工業大学～」
日時:10月6日(土)
会場:豊洲校舎 |

各イベントの詳細は下記を参照ください。
<https://office.shibaura-it.ac.jp/bokin/80th/80kinenl.html> 問い合わせ:地域フォーラム事務局 TEL:03(5459)4241

鉄中・育英と連なる 芝浦の史脈

80th Anniversary 2007

2007年度



合併のあいさつ状

財務課の保管する文書の中から1枚の通知はがきが見つかった。1953年10月1日付、差出人は連名、学校法人芝浦学園理事長・松縄信太および学校法人鉄道育英会理事長・山本頼雄である。鉄道育英会の経営する東京育英高等学校が芝浦学園と合併することになり、芝浦学園がその事業の一切を継承するというあいさつ文をしたためたものである。

東京育英高等学校は芝浦工業大学中学高等学校の前身、その源は東京鉄道中学（鉄中）である。鉄中が開校したのは1922年。有元史郎が芝浦工大の前身、東京高等工商学校を創設したのは1927年だが、その5年前になる。

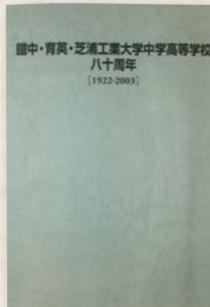
1921年、鉄道創業50周年を記念する事業の一つとして設けられた鉄道育英会が開設した学校が鉄中である。国鉄職員とその子弟を主な生徒対象にした。鉄中の修業年限は5年。夜間授業の中等学校、一流の教授陣、少人数教育、熱心な生徒と高い学力水準を特徴とする学校であった。

1942年、鉄道職員養成学校と誤解されるのを避けるため、経営する鉄道育英会にちなんで鉄中は東京育英中学と改称した。その後、東京育英中学校、東京育英高等学校と変遷し、芝浦学園に吸収合併後は昼間と夜間を併用した学校に衣替えした。1954年には芝浦工業大学高等学校と校名変更。さらに1982年、校舎が池袋から板橋へ移転した時に中学校を新設し、芝浦工業大学中学高等学校と改称して今日に至っている。

鉄中創立の発案者であった十河信二（そごう）鉄道省経理局会計課長（後の国鉄総裁）は、個性尊重の自由主義的な高等普通教育を追求した。国鉄という企業の制約がありながら、このような教育の場が構想され実現していったことも私たちの学園の歴史である。国鉄から本学に移り来

た教職員も相当数になる。この縁を大切に、優れた教育の営みを学園で後々に伝えていきたい。

既に鬼籍に入った方だが、鉄中1回生の榊田光さんは、同窓会（1993年）の席上、在学時代を偲んで次のように語っている。（記念誌『鐵中・育英・芝浦工業大学中学高等学校八十周年 [1922-2003]』より抜粋）



鉄中は夜間授業ですが、教授陣は立派な一流の方々と、向学心に燃える生徒が集まった特殊な中学でした。私どもは、昼は国鉄の職員として勤務し、夜は鉄中に通って勉学に勤めました。授業は、優秀な先生方が熱心に講義されるので、我々も昼の疲れを忘れ、必死で耳を傾けて謹聴しつつ、しつこく質問もしました。

記念誌
『鐵中・育英・芝浦工業大学中学高等学校八十周年 [1992-2003]』

榊田さんは鉄中卒業後、第一高等学校、東京帝大法学部に進み、社会に出ては裁判官、弁護士として活躍した方である。鉄中の卒業生には医師や教師になった人も少なくない。確かに多くは国鉄に残って幹部職員になったが、各界で活躍する人材を輩出した。卒業生が多様な進路を選択したことに鉄中の教育の成果がうかがえる。

卒業生は、鉄中から東京育英高等学校まで1,854名にのぼる。10月14日は鉄道記念日。1872年のこの日、新橋・横浜間に鉄道が開通した。今年の記念日、さいたま市の大宮に鉄道博物館が開設される。同日、卒業生には懐かしい校舎のあった池袋で鉄中・育英・芝浦高校（定時制）の同窓会が開かれる。

INFORMATION 芝浦工業大学 歴史写真展開催

芝浦工業大学の歴史を振り返る写真展を 10月9日から11月2日まで開催します。 入場無料

- 会場：豊洲校舎 1F テクノプラザ
- 時間：平日 10:00～16:00 土曜 10:00～14:30
日曜・祝・祭日 休館

80th Anniversary 2007

大森校舎は何処に



本学の前身である東京高等工商学校(東京工商)の発祥の地は、まだ明らかではない。80年の歴史を持つ本学としては恥

ずかしい思いである。なんとか誕生の地を確認できないものかと、昨年夏より探索を始めたが、まだ満足な結果は出ていない。以下簡単にその調査の経緯を述べ中間報告としたい。

現在の手掛かりとなることは次の①～③である。

- ①東京工商が1927年に東京府荏原郡大森町1073番地に設立されたこと。
- ②京浜電鉄・学校裏駅(現在の平和島駅)から徒歩3分、省線(現在のJR)大森駅から徒歩10分の地にあったこと。
- ③昔あった大森簡易裁判所の近所の城南女学校が移転した跡に、東京工商がその校舎を引き続き使用した可能性が大であること。

まず大森町1073番地がどのように変遷してきたかを見ると、1932年、荏原郡が東京市に併合され大森区大森3丁目2番地となり、さらに戦後蒲田区と合併して大田区となり、現在は大田区大森西2丁目2番地に該当している。しかしその2番地は約130m四方に及び、その広域から発祥の地を選ぶことは至難なことである。現地調査の折に何人かの住人や歩行者に声をかけたが、東京工商を知る人はいなかった。しかし両駅からの歩行時間は大体②に一致した。



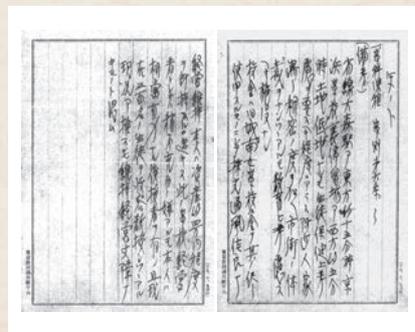
資料1

次に城南女学校を調べると、当時は大森町に女学校(旧制)は皆無で、現戸板女子短大の創業者戸板関子女史により、1923年に設立された学校で、設立4年後には新校舎を梅屋敷に建て、移転している。③が事実だとすれば東京工商の番地は城南女学校と同じ1093番地(資料1)になる

はずであるという疑問が生じる。

③を確かめる試みとして、城南女学校と東京工商の建築図面を揃え、比較検討してみると、素人ながらも類似点が見られた。念のため、本学財務部施設担当次長小山武氏(一級建築士)に検分してもらおうと「同一校舎の可能性大」という回答であったので、③の裏付けとなった。

さらに2007年11月に「東京工商は城南女学校校舎をそのまま使うので教育上支障はない」という趣旨の文書(資料2)を発見し、さらに③の信頼度が高まった。一方、1925年の城南女学校学則(資料3)で、同校の所在地が東京工商と同じく大森町1073番地であることを発見した。それは東京工商開校2年前のことである。不思議なこともあるものだと、戸板女子短大に問い合わせたが、戦災で当時の資料はないとの返事だった。



資料2



資料3

本調査を一応まとめると、本学発祥の地は城南女学校であることは濃厚である。その地は現住居表示によれば、大田区大森北6丁目23～24番地に該当することがわかった。東京工商設立の所在地と異なる疑義が払拭できなかったことを残念に思う。

最後にご多忙のところを懇切にお世話くださった大田区図書館窪田氏、東京法務局千葉氏、大田区役所外环氏、戸板女子短大佐藤女史はじめ多くの方々にご心よりお礼申し上げます。

80th Anniversary 2007

八周年記念祭

2007年度

昨年11月4日に開催された創立80周年記念式典で、創立者、有元史郎の三女、有元美佐子・ヘンソンさんが感動的な講演を行った。話の中で、1933年(昭和8年)に、創立8周年と新校舎の落成を祝って記念祭が盛大に挙行されたことが紹介された(本誌特別号参照)。

有元史郎は『東京高工新聞』(1933年11月10日付)に「八周年記念祭を祝す」と題した文を寄せ、「八年といえ、これを少年にたとえれば既に学齢期に入って一人歩きのできる年である。本校また八歳の^{よわい}齢を重ねて、ここに八周年記念祭を行った」と述べている。記念祭歌まで作っていた点からも取り組みに力が入っていたことがうかがえる。

年記念祭を挙行したのは固より、深く^よ掘る所があったからである」と所見を述べている。

今年是北京五輪の年である。その開会式は2008年8月8日午後8時8分に開始されるという。8を並べたところは主催者の思い入れであろう。漢字の本案、中国では、「財をなす」「金持ちになる」を意味する「発財」の「発」と「八」が広東語で同音であることから吉数となったと言われる。日本では、漢数字の八は末広りの字形から縁起が良いとされる。有元もまたこの吉数にこだわって記念祭挙行の時を選定したと思われる。

有元は八周年の意義に言及して、「本校の将来は現在の発展なるが如く、本校の現在は過去八星霜の^よ総和である。(中略)本校に対する純真の創造は過去に依りて現在を理解し、現在に依りて将来に対する画策を樹て、それに立脚して本校の教育的理想を実現せねばならぬ」としている。まさに「温故知新」である。

さらに有元は寄稿の中で、工業立国を担う技術者の社会的地位向上の必要性を強調した。そして、「単に^{せつ}利那的に八周年記念祭を祝することをなさずして、この祝典をして永遠に意義あらしむべく一層^{せつ}勉勵努力して我が国工業界の先駆者たらんことを切望する次第である」と文を結んだ。70年余の時を経た今も、襟を正させる言葉である。



八周年記念祭プログラム

それにしても、本学創立の年を考えると、これは8周年ではなく6周年の記念祭ではないかと、いぶかる向きもあろう。また、5の倍数の年に周年祝賀の行事を催すことが一般的であり、8周年を祝うのは珍しい。なぜ^{こと}殊^{さら}更に8なのか、興味のわくところでもある。

芝浦工大の前身、東京高等工商学校の設立申請がなされたのは1927年2月26日。この日は1926年度(昭和元年度)に属する。この年度を起点に数えて、創立から8番目の年度ということで1933年11月3・4日に8周年記念祭を開催したという解釈が有力である。ちなみに、1926年には、有元は友人と共同で大阪に商工学校を創設したが、その学校は間もなく友人に譲っており、これを本学の起源と解する説は見当たらない。

また、有元は前出の『東京高工新聞』で、「『八』は我が国に^お於いては実に^め目出度き数であり、本校また八周



『東京高工新聞』(1933年11月10日付)

80th Anniversary 2007

われらが工学 英気鍾む^{あつ}

「創立80周年記念事業80企画」の1つの企画に「校歌斉唱プロジェクト」がある。3月18日、東京国際フォーラムで行われた学位記授与式で、その日のために結成された合唱団、本学の学生や教職員有志が併設校生徒のプラスバンド演奏によりステージで声高らかに校歌を歌った。この校歌、本学の前身、東京高等工学校のそれとして1941年11月18日に制定発表されたが、新制大学移行後に「芝浦工業大学校歌」となった。

作詞は北原白秋(1885-1942)。生涯に数多くの詩歌を残し、今なお愛唱される童謡の生みの親、日本を代表する詩人である。作曲は山田耕筰(1886-1965)。数多くの名曲を作った日本音楽史上の巨匠である。有名な童謡『この道』は二人の合作だが、手掛けたのは童謡だけでなく、校歌、自治体歌まで幅広い。本学の校歌は今も歌い継がれている貴重な作品の1つである。

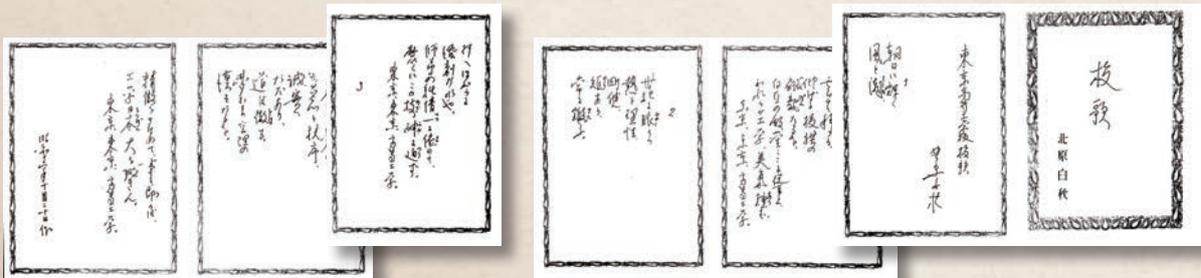
北原白秋の研究者、佐賀女子短期大学の横尾文子教授が本学校歌について書いた『佐賀新聞』(1997年10月19日付)の掲載記事によると、白秋は1937年に眼底出血に見舞われ、急速に視力が低下したという。困難な詩作活動を強いられながらも、1941年10月20日、白秋は本学校歌を作り上げた。亡くなる1年ほど前のことである。白秋に作詞を依頼したのは本学の創立者、有元史郎だが、校歌が完成する3年

前の1938年に有元は他界し、想いの結実を見届けることはできなかった。

校歌の出だし、「朝日に輝く風と潮」の「潮」は、かつて白秋の生家で製造していた酒の銘柄でもある。そのことに照応すると思われるが、校歌1番の一節「英気鍾む」の「鍾」に注目したい。壺の形をした酒器を意味し、「深く愛する」、「非常にかわいがる」という意の「鍾愛」の「鍾」であって、「集」ではない。この「鍾」の字を、晩年の白秋は他の詩にも用いたという。

これまで、本学では「鍾」が「鐘」と書き記されることもあったが、校歌の原詩に当たり、前述の横尾教授にも照会して確かめたところ、正しくは「鍾」の字であることが判明した。「鐘」は「釣り鐘」の意であり、「酒壺」をも意味するのは「鍾」の方である。今後は表記に際して注意が必要である。

白秋直筆の歌詞原稿および「東京高工校歌 北原白秋作詞 山田耕筰作曲」と題された筆写譜原本はいずれも本学が所蔵しており、現在、豊洲校舎研究棟4階のショーケースにそれぞれの複製を展示している。ちなみに、1994年、本学は創立70周年記念事業の一環として、校歌原詩の複製を北原白秋記念館(福岡県柳川市)に寄贈した。また、日本近代音楽館(東京都港区麻布台)には山田耕筰の校歌自筆譜が収められている。



北原白秋自筆の校歌原詩

史料に見る 芝浦工業大学⑪

(2007年2月号から始まった連載企画)

大宮校舎の 開設

「年々歳々花相似たり
歳々年々人同じから
ず」、4月初め、桜の花
も見頃、新入生を迎え
た大宮校舎は活気があ
る。入学ガイダンスの
折、中庭にはさまざまな
サークルが色とりどり、



開校時の大宮校舎

思い思いに工夫をこらして出店。あちこちから新入生に入部
勧誘の声がかかって賑々しい。新調した気持ち^{はつらぎ}が広場に行
き交い、キャンパスが1年中でもっとも華やく^{はつらぎ}時季である。

その大宮校舎が開設されたのは1966年4月のこと。学生
数の増加から田町の校舎が手狭になり、新たな校地を探し
求めた結果、1963年に大宮に約143,000㎡の土地を購入し
て実現したキャンパスである。

当時の服部定一学長は「芝浦工業大学はかねてから静
かな、環境の良いところに、ゆったりとした校地をもとめ、(中
略)緑のある、よい空気のもとで、よりよい教育を行いたいと
考え、かつ現在芝浦地区で実施している教育の一部を移設
したいものとの夢を抱いていた」(1966年3月30日付埼玉新
聞)と述べている。

開校時の様子は、本学システム工学部の開設を記念して
出版された『芝浦工業大学—60年の軌跡—』(1991年、本
学広報室発行)に「周辺に建物はほとんどなく、東大宮駅の
ホームから校舎が見えた。駅から校舎までの道は舗装され
ておらず、駅の階段を降りたところには、芝浦工大専用の長
グツを入れる下駄箱が、校舎の入り口にはグツの泥を落と
す特製の流しがあった」と紹介されている。

1965年6月1日に着工、突貫工事とも言える異例の速さ
で1期工事が行われ、1966年3月15日に竣工。同月30日
にはその落成式が挙行された。設計監理は鉄道会館一級
建築士事務所、施工は(株)大林組である。開校当時の大
宮校舎は、2号館(事務棟)、3号館(教室棟)、体育館、大学
会館、クラブ棟、学生寮、そして守衛所から成り、現在の生協
学生食堂の位置が正面入り口だった。

2号館、3号館があって、なぜ1号館がないのか、不思議
に思って、いろいろ当たってみた。前出の『芝浦工業大

学—60年の軌跡—』には「当初、大学会館の向かい側(現
在の齋藤記念館の場所)に1号館(管理棟)を建設する予
定だったという説もあるが、定かではない」と記されている。

鉄道会館の設計による「芝浦工業大学新築工事」の校舎
配置図としては、1965年5月12日付で作成された図面が当
初のものと思われる。現在目にするのできるものは、その
後に訂正されたものばかりである。いずれの訂正版にも1
号館は登場しない。

建物の位置からして、大学会館を1号館と見る人は少な
くない。しかし前述の落成式で配布された記念冊子の中で、
建物の概要説明は、2号館、3号館、体育館、大学会館の順
でされており、大学会館は実質1号館にふさわしい位置付
けとはなっていない。謎が残る。

特筆すべきは体育館。地上2階、延べ面積2,035㎡の建
物は当時、日本の大学の体育館で2番目の大きさだったと
いう。その一方で教育施設が未整備で、学生も教員も、建
物は新しく立派なのに設備が不揃いなことに驚いたという。
その一端が、『傳一学園の歴史と校友会』(1974年、本学
校友会クラス代議員連絡会発行)に「図書館は独立した建
物ではなく、図書室として1教室分がかるうじて確保され
ていたに過ぎなかった」と記述されている。

その後、4号館(1970年竣工)、図書館(1971年開館)、齋
藤記念館(1990年竣工)、と新しい建物が次々に建設され
ていく。大学のキャンパスとして佇まいを整える前、大宮校
舎は産声をあげたばかりであった。



埼玉新聞(1966年3月30日付)

[2008年5月号]

史料に見る 芝浦工業大学^⑫

(2007年2月号から始まった連載企画)

満年齢と数え年

「満年齢」、岩波書店の『国語辞典』（第六版）には「年齢の数え方の一つ。生まれた時からその時までの時間を何年何か月何日で表したるもの。また、その年未満を切り捨てたもの」と出ている。これに対して「数え年」は、「生まれた年を一歳として、あと新年のたびに一歳を加えて数える年齢」とある。

日本では古くから数え年が使われていたが、1902年に「年齢計算ニ関スル法律」が制定され、満年齢が使用されるようになった。しかし、一般には数え年が使われ続けたことから、1950年、国は「年齢のとなえ方に関する法律」を施行し、年齢を数え年で言い表わす慣習を改め、満年齢によって年齢を表わすことを国民に推奨した。

国・地方公共団体の機関に対しては、満年齢を使用しなければならない、とした。特にやむを得ない事由により数え年で年齢を言い表わす場合は、そのことを明示することを義務付けた。

大学の創立者、有元史郎について、これまで多くの紹介の場面で、1927年(昭和2年)、「弱冠32歳」で大学の前身校、東京高等工商学校を創立したとされてきたが、このことに言及した学内外の文書には「弱冠30歳」、「弱冠31歳」という記述もある。なぜこうした違いが生じるのだろうか、調べてみた。

有元が東京高等工商学校の設置申請の折に提出した履歴書には、彼の誕生日は1896年(明治29年)6月25日と記されている。設置申請をしたのは1927年の2月26日。東京高等工商学校の開校は5月1日であるから、その時の年齢は、満でいうと30歳ということになる。

ちなみに、有元が亡くなったのは1938年(昭和13年)5月30日。本来は数え年で表す享年は43。満年齢では、誕生日前なので41歳となる。

有元史郎の三女、有元美佐子・

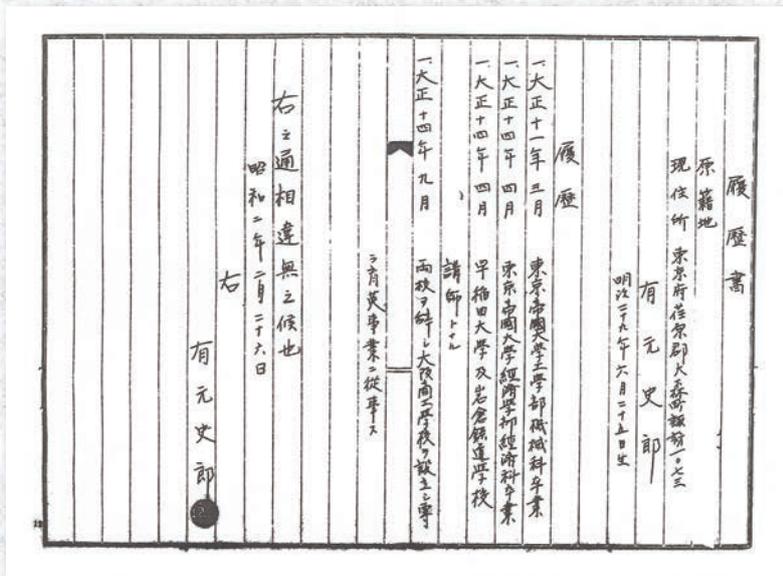
ヘンソンさんは、2007年に刊行された本学創立80周年記念誌『温故知新』に寄せた文の中で、「創設者、父「有元史郎」を偲ぶ」と題し、父親について次のように述べている。

好奇心旺盛で多芸多趣味、何にでも十二分に能力を発揮して、思う存分に人の倍の密度で人生を生きたので、42歳で神様がきめた寿命を使い果たしたのかも知れないとも母は云っておりました。

大学を出たばかりで資産もない、弱冠31歳の父が新しく学校を開設するという事は、大胆不敵の挑戦でした。日本の将来に絶対必要であるとの強い信念、理想の教育実現への灼熱^{しやくねつ}の情熱、苦節の過去から得た努力に対する自信等が、父をしてこのような普通ならば考えられない大事業に導いたと思います。

有元史郎、42年近く、^{ほらんぼんじょう}波瀾万丈の人生を送った人物。本学の学祖である。

有元史郎の履歴書コピー



[2008年6月号]

栄光の芝浦工大 ハンドボール部

史料に見る 芝浦工業大学^⑬

(2007年2月号から始まった連載企画)
13回目は本学名誉教授、
住広尚三先生からの寄稿です。

本学のハンドボール部は1950年春、高嶋^{たかしまさよし} 洸先生(元監督・当時東大文部教官)が、本学体育教室の非常勤講師就任をきっかけに数名の学生有志が働き掛け、三浦^{みうら} 元秀先生(当時補導教務課長・建築学科教授)に部長をお願いして創立された。当時は、まだ戦後の焼け跡が生々しい本学の中庭で練習を開始し、運動用具も乏しく食糧事情も悪かった。また大学が設置(1949年)されて日も浅く、入学生が僅か150名程度。部員確保もままならず、ハンドボールを経験した者は2名、未経験者ばかりの「素人の集団」でまったく部の体裁をなさなかった。その年の秋、初の公式戦(関東新制大学選手権)に出場したが、3校中最下位の成績であった。

しかし、部創立3年後あたりから全国の高校より有力な新入部員を迎えられるようになり、また、筆舌に尽くせないほど過酷な特訓が伝統の長野県浅間温泉での春・夏期合宿練習が開始され、ハンドボール部の黄金時代を迎える布石となった。その後、三浦部長、高嶋監督の親とも変わらぬ親身な指導、援助の下で駒沢ハンドボール場(現駒沢オリンピック公園)をホームグラウンドにして駒沢合宿所(滴水寮)で部員全員が寝食を共にして厳しい練習に耐え、数々の輝かしい戦績を残した。

1959年に4大タイトル(全日本学生選手権大会、全日本総合選手権大会、全日本学生王座決定戦、全日本室内総合選手権大会)の独占獲得、47連勝(当時、バレーボール「日紡貝塚」チームの258連勝に次ぐ連勝記録)など、枚挙にいとまがない。春秋のリーグ戦をはじめ、ハンドボールの主要な大会の優勝は39回、準優勝は22回、「芝浦工大ハンドボール部」の名を全国津々浦々まで響かせた。だが、1968年の学園紛争を機に有力な新入部員を迎えることができなくなり、「常勝芝浦」を保持することが困難になって、「優勝」の文字からは縁遠く今日に至っている。

筆者の在籍はハンドボール部の長い歩みの中で僅か4年であったが、数々の思い出の中、筆頭は1964年3月にチェコスロバキア(当時)のプラハで開催された第5回世界選手権大会に日本代表選手団の一員として参加し

たヨーロッパ遠征である。日本チームが世界選手権大会へ出場したのは2回目だったが、「世界の檜^{ひのき}舞台で勝つこと」は日本ハンドボール界の悲願であった。その開幕第1戦で前大会7位のノルウェーと対戦して18対14で勝利を収め、球史に残る貴重な1勝をあげることができた。今日では日本選手の体格や技術も向上し、国際試合の経験も豊富で、当時と比べると格段の差がある。今振り返れば僅か1勝であったが、日本チームの一員として球史を飾ることができたことを大変うれしく誇りに思う。

また、ハンドボールのルールが大きく変わり、11人制から7人制に移行した1963年、向かうところ敵なしだった芝浦工大ハンドボール部が春夏の大きな大会で優勝を2度立て続けに逃した。主将として大きなプレッシャーを感じたが、先輩からの叱咤^{しつたげきれい}激励に奮起して秋のリーグ戦で優勝、学生王座にも輝いた。鮮烈な思い出である。



ハンドボール部記念誌他

[2008年7月号]

史料に見る 芝浦工業大学⑭

(2007年2月号から始まった連載企画)
14回目は本学名誉教授、
笠井尚雄先生からの寄稿です。

恩師 弓削政隆先生を偲ぶ

本学の機械工学科で長い間学生教育に尽くされ、名誉教授でもあった弓削政隆先生は私の恩師、生涯にわたる大恩人である。弓削先生は、



追悼集「弓削政隆先生の思い出」
(1997年刊行)

1901年、三重県の鈴鹿市にお生まれになり、旅順中学から第八高等学校に進まれ、1926年、東京帝国大学工学部機械工学科を卒業された。その後、月島機械(6年間)と横川橋梁製作所(10年間)に勤務されたが、特に横川橋梁時代、埼玉県鳩ヶ谷市に建設された高さ312mのNHKラジオ用の電波発射の鉄塔は、当時世界一の高さを誇る建造物で、これは先生が中心設計者となり造られたものである。先生は1944年に横川橋梁を退職、朝鮮の平壤工業専門学校に教授として赴任され、1945年の終戦に至るまで勤務された。復員後、1947年3月芝浦工業専門学校教授に就任され、1949年には芝浦工業大学の教授となられた。ここから先生の機械工学科建設の長い長いご活躍が始まるのである。

当時の芝浦工業大学は、新制大学の第1期校として、「機械」と「土木」の2学科で発足したが、クラスも20名足らずで、学生の学力も不足していた。学生が将来何とか技術者として生きていくために、知識の不足はがんばりでカバーするという実践教育を施され、これを「根と馬力の教育!」と名付けていた。何があっても絶対に音を上げない挑戦的根性の涵養である。

先生の担当科目は、機械工学の中心をなす「材料力学」であったが、長いエンジニア生活に基盤を置いた、実用的な学問として教えてくださった。試験の時間の長さは、短くて2・3限、長い時は朝から夕方まで及ぶこともあった。これは学問の探求に対して、いかに真剣な時間を体験させるか…との先生の教育方針によるものだった。

当時の学科の教員は、大体教授が3名、助手が2、3名という少人数の陣容で、いかに学生に暇を与えない教育を施すか? …これが最重要な問題で、結論的に世の中で希求していた「設計、製図能力」を身に付けさせるた

め、多くの課題を与えることだった。その結果として、こうした能力は、正に日本一だったと自負している。本学の卒業生の、企業における活躍の実態を知った当時の著名な経済評論家、三鬼陽之助氏が、機械の学生の採用に関して、東京大学と早稲田大学に本学を加えた3校を推奨する論調の文を発表してくれた。このことがあってから、学科の求人や就職が爆発的に伸びていった。

「すべては学生の幸せのために!」、先生の生涯はこの一念に貫かれていた。学生の就職先の開拓においても、弟子の育成においても、常に凄まじいばかりの執念で臨まれた。先生が学生たちにかけての思い、その偉大な業績は超人的であったと思われる。先生が残された「弓削語録」の中の一つを最後に紹介させていただく。

「ソロバン抜きで、無心で人のために尽くせると云う事は、人生最高の幸せである!」

ちなみに、毎年、機械工学科の優秀な卒業生に授与される「弓削政隆賞」は先生のご遺族から賜った寄付を基金に設けられたものである。先生が亡くなられてから13年、利他のために生涯を貫かれた先生の尊いご一生に対し、ただただ尊敬と感謝の念を抱くのみである。



在りし日の弓削先生(中央)
および先生と親交の厚かったお二人、筆者(向かって左)と
元本学機械工学科の猪田利祐先生(1992年撮影)

2008年度

[2008年8・9月号]

史料に見る 芝浦工業大学^⑮

(2007年2月号から始まった連載企画)
15回目は本学名誉教授、
小川誠先生からの寄稿です。

文化人 齋藤雄三先生と 機械工学第二学科の誕生



在りし日の齋藤先生
(1969年3月 卒業生謝恩会にて)

機械工学第二学科を設立された故齋藤雄三先生は、1902年文京区千駄木にお生まれになり、1926年東京帝国大学工学部機械工学科を卒業後、毎日新聞社に入社、1928年高速輪転機導入のため1年余り渡米、日本の印刷技術の近代化に貢献された。1938年国策の大日本兵器(株)の設立に招聘され、対空機関砲、ゼロ戦エンジンなどを製造する、我が国独自の専用工作機械の開発に成功された。

先生は、終戦から10年余りを経て1959年本学教授に就任された。当時の機械工学科は教育が高く評価され、求人が殺到し受験生も激増していた。在籍者数は200名をはるかに超えていた。反面、教育環境が悪化し、自宅学習の大半が製図課題で占められることに学生の一部が疑問を抱き始めた。やがてそれが大きなうねりに変わり、事の重大さに大学は齋藤先生に新しい機械工学の学科設立を委ねた。

“鉛筆一本、紙一枚譲り受けずに独立した学科である”先生が屢々口にされていた言葉である。まさにゼロからのスタートで先生の壮絶な学科興しが始まった。国内初のドラフター導入により製図教育を一変させ、予習とスピードを求め、実験・実習に力を入れる実践的教育を徹底させた。4年次を研究主体の卒業論文に年間を通して集中させた。

手狭な芝浦校舎でのスペースの確保は分秒を争い、業者にドラフター120台を即時掻き集めさせ、夜半の搬入に及んだ。また、諸室の拡張に移転を3度も繰り返された。先生は学科を案じ退職間近の1971、1972年の2年間定員倍増を大学に申し入れ、予算獲得に乗り出された。それを機に学生、教員の意気込みが高まり、研究が芽吹き、学科の勢いが加速されていった。このような先生の強烈な行動は、教育の厳しさにも相通じ、学生と若手教員の将来を思い、激しい口調で諭された。叱っているように感

じたが、いつも心の内面が見える語りであった。大らかに温かく心の在り方を教育の原点に据えたように思われる。

齋藤先生は、第二学科が軌道に乗り学内外に認められ始めたころ、住居を茅葺き寄棟造りの母屋、離れなどからなる松戸の古民家に移され、その住まいを“紙敷庵^{（註）}”と名付けられた。自然を愛した先生は、紙敷庵の空間に広がる日々変わる木々の緑、花の彩りそして茅葺きの造形美をととても慈しんでおられた。この懐かしい日本の原風景は昨年テレビロケにも使われたとのことである。また、陶芸、書画に造詣が深く、衣と食に一番にこだわり、お酒の嗜みを究め、仏教を敬重し釈尊の生誕地を訪ね旅行されていた。先生は国家技術の粋を担ったエンジニアで、大いなる文化人でもいらした。

紙敷庵を毎年お訪ねした。“一科はどうなんだい、二科はいいだろう”決まって問われた。1980年代半ば「キチ二」の愛称が生まれた。次なる「二」ではなく固有の学科名の証でもあった。設立後46年経た現在、機械工学第二学科は卒業生の満足度が最も高い。入試合格者の定着率も高く、実質倍率は機械工学科とあまり変わることはない。

先生は人生を大きく生きられた。晩年、私財9億円を本学にご寄付された。1990年大宮キャンパスに齋藤記念館が建立された。第二学科の行動力ある優れた卒業生には齋藤雄三記念賞が授与されている。齋藤雄三先生に師事し、機械工学第二学科の教員を務め得たことに無上の幸せを覚え、尽きせぬ感謝の気持でいっぱいである。

(注)現在は作家、氷上勉が命名の竹紙房と呼ばれている。



追悼集「齋藤雄三先生の想い出」
(1997年刊 題字「青苔」は、
先生の令夫人、齋藤トシさんによる揮毫)

[2008年10月号]

芝浦工業短期大学の存在意義

史料に見る 芝浦工業大学⑬

(2007年2月号から始まった連載企画)

16回目は元芝浦工業短期大学および芝浦工業大学助教授、現国土館大学文学部教授の岩間浩先生からの寄稿です。



芝浦工業短期大学設置認可申請書

芝浦工業短期大学は、1950年に機械科と電気科の2学科の短大として開設。1952年には交通科を増設して芝浦短期大学と改称された。1964年に一旦は廃止されたが、1966年に芝浦工業短期大学（機械科・電気科）として再設置（学長は岩竹松之助工学博士）。各学科の定員35名の小規模な学校だったが、芝浦工業短期大学と芝浦短期大学を合わせて、卒業生は2,074名を数える。工業界を中心に、技術者として、経営者として、公務員として、また、中学校技術科の教員として、卒業生は社会に貢献してきた。5年制二部（夜間）とは異なり、2年制（夜間）の、修学意欲ある勤労学生を受け入れる工業短期大学として開学。日本は工業を中心に発展すべきであるという、工業立国復活をめざして設立された学校である。学習意欲のある勤勉な学生が毎日午後6時から9時まで、工業専門科目のみならず、一般教養科目も学び、ある者は授業後にスポーツで汗を流し、友と人生を語りあい、青春時代を過ごした。その仲間意識は強く、いまだに毎年同窓会を開いている学年もあるほどである。

ユニークであったのは、短期大学でありながら、希望者は中学校技術科の教員免許状（二種）を取得できたことであり、約50名の卒業生が技術科の教員になって教育界に貢献した。当初は教職教科として中学校職業科（二種）教員免許の課程認定を受けていたが、社会構造の変化によって選択科目である職業科を置く中学校は数えるほ

どしかなくなり、職業科の免許を取得しても教員になる者は皆無と言って良い状態であった。これを何とか改善したいと切望した教職員が、中学校必修科目「技術科」教員養成の課程認定を受けるために尽力した。工業大学で中学校技術科の課程認定を受けることは相当に難しい問題であった。工業大学では木工と栽培の実習が不可能だったからである。

そこで当初は、木工の集中実習を都立職業訓練所に、栽培は東京農業大学に集中講義と実習とを依頼することを条件に芝浦工業短期大学に中学校技術科教員養成課程が認可された。当時、中学校技術科の教員が大変に不足していたため、認定が下りるや、東京都から担当課長がわざわざ挨拶にわが短期大学を訪れたほどである。短大卒ではあったが技術科の免許を持つ学生は、次々と教員に採用されていった。

短期大学が終焉を迎えたのは、当時の工業大学学長が一つの大学に5年制二部と夜間の短期大学を置く意味がないと判断し、学校法人・理事会が（経費削減からか）短期大学の廃止を決定したことによる。1976年度から学生募集停止となり、芝浦工業短期大学は短い使命を終えた。

波乱はあったものの、全体として芝浦工業短期大学は、時代の要請に応え、技術社会を担う卒業生を輩出し続けた。小規模な学校だけに、学生同士、学生と教職員間のコミュニケーションが密で、学生たちは心の通った学園生活を享受できた。他に代えることのできない存在意義と命を持った学校、青春時代の若者たちが充実した日々を送った尊い珠玉のような存在であったことを、この学校の教育にかかわった者として、卒業生たちや諸教職員に代わって証言したく思うのである。



電気科実験授業風景
(1971年度卒業記念アルバムより)

[2008年11・12月号]

誇り高き芝浦工大 韓国同窓会

史料に見る 芝浦工業大学^⑰

(2007年2月号から始まった連載企画)
17回目は創立者有元史郎のご長男、
有元英史さんからの寄稿です。

1980年から4年間、私が丸紅(株)ソウル支店に駐在勤務していた時の出来事である。当時の韓国は今と違って対日感情は極めて悪く、特に教科書問題が起きた時は最悪だった。日本大使館には連日のように抗議のデモ隊が押しかけ、投石を繰り返していた。

折しも、プレオリンピックの野球競技が行われ、その日本対韓国の決勝戦を見に行った時のこと、私の前の方の席で日本人学校の生徒たちが日の丸の小旗を振って応援していたが、そこに韓国人たちが突然押しかけ、その旗を次々に取り上げて壊してしまった。それを見て私は身の危険を感じた。家でテレビを見ても、戦時中に日本の軍人たちが韓国人に対してどんなひどい仕打ちをしていたかといった反日感情をあおる番組ばかりだった。

私が最も驚いたのは、会社の韓国人の部下たちの態度だった。彼らは日本語が極めて堪能にもかかわらず、一歩会社を出ると、エレベーターやバス、電車の中で私が日本語で話しかけても一切返事をしなかった。それどころか、顔を背けて自分はこの日本人の連れではないという態度を取るのである。

そうしたある日、芝浦工大韓国同窓会の会長、宋貞鏞さんが会社に来訪。「韓国にいられている創立者の息子さんに、近く行く同窓会に出席していただきたい」と要望された。数日前、乗っていたタクシーから日本人とわかった途端に降ろされた私は、その苦い経験から当分は外出

を控えたい心境だった。しかし、同窓会の当日は車で案内するからぜひにと請われ、出席することにした。

連れて行かれた所はソウル郊外の大きなガーデン形式の焼肉屋だった。そこには戦前、戦中に芝浦を卒業した十数人の韓国人の卒業生が集まっていた。

その日の会では、韓国語のわからない私を気遣って、すべて日本語で話すことが取り決められていた。卒業生は日本語を話すのは何十年ぶりだと言いながら順々に自己

紹介、学生時代の思い出や近況を話した。そして隣同士の雑談に至るまですべて日本語で話を交わしていた。周りのテーブルには韓国人のグループがいた。そばを歩きかう人たちも、いぶかしげに私たちを見ていた。しかし、卒業生たちは周りを気にする素振りも見せず、日本語で長い間しかも大声で話した。私の部下たちとあまりにも違った堂々たるその姿に、母校に対する強い誇りが感じられ、深く感動した。そして、厳しい環境下、不安な思いで暮らしていた私はこの上もなく力づけられた。

私の80年の人生で最も感銘を覚えた出来事、それが芝浦にかかわるだけにぜひ皆さまにお伝えしたいと思い、筆を執った次第である。私が韓国で出会った方々のように、芝浦の卒業生や学生たちが母校に対して強い誇りを持ち、互いに助け合って人生を歩んで行くとすれば、芝浦の学校創立と基盤づくりに一生を捧げた私の両親もさぞかし満足なことと思う。



1990年、帰国した有元さんのもとに、「その後も元気に集まっている」という便りとともに韓国同窓会から送られてきた記念の絹製風呂敷

[2009年1月号]

史料に見る 芝浦工業大学⑱

(2007年2月号から始まった連載企画)

柏の青春 毎日が喜び



『十年の歩み』(芝浦工業大学柏高等学校創立十周年記念誌)

1980年4月、千葉県柏市に芝浦工業大学柏高等学校(以下、芝浦柏高)が開校された。「創造性の開発と個性の発揮」を建学の精神に掲げ、「おらかな進学校」として地歩を固めてきた。同校の創立30周年記念式典の開催が2009年11月に予定されている。

開校以来の懸案の一つが芝浦柏高独自の校歌を作ることであった。芝浦工大の校歌はあっても、工学を学ぶ者たちを高らかに謳い上げた歌詞が、普通科の高校にはなじまなくなっていた。事実、卒業生は文系や工学以外の理系の分野にも、多種多様な進路を開拓していったのである。

それまでも教職員が自らの手で校歌を作ろうと考え、何度か生徒たちにも働きかけたことがあったが、いずれも不発に終わった。動きが本格化したのは1987年のことである。創立10周年を控えて、徒に先に送らず、今こそ校歌を作るべきだという声が起こり、創立10周年記念事業の一環として校歌を作ることが決まった。

作詞、作曲をシンガーソングライターの小椋佳(敬称略)にお願いすることになった。1975年、布施明が歌った「シクラメンのかほり」が大ヒット。小椋はその作者として広く知られるようになり、その後も数々のヒット曲を出している。本名は神田紘爾。当時は音楽活動と並行して、日本勧業銀行(現みずほ銀行)の国際金融部財務サービス室長も務めていた。

小椋が芝浦工大の校歌の作詞者、北原白秋に魅かれていますこと、歌詞やメロディーはひらめいても採譜できないため、曲を具現化する補助者を必要としてきたこと、校歌の制作依頼後にわかった小椋の人物像も興味深い。

1987年10月下旬、在校生全員と卒業生一部を対象に作文形式のアンケートを実施した。小椋の要望を受けてのことである。生徒サイドから見た芝浦柏高像を得たい、

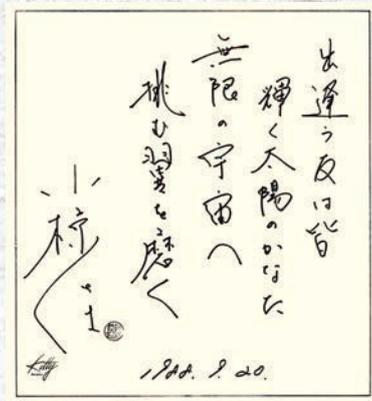
それも断片的な語句ではなく文の形をとって、より掘り上げてまとまりのある考えを知りたいということであった。全員の回答を小椋に送り届けたが、中には彼を不快な思いにさせたものもあった。出来上がった校歌の歌詞に用いられているシンプルな言葉の裏には、芝浦柏高の否定的な側面を鋭く突いた小椋の指摘が潜んでいるように思う。

1988年5月、校歌の原案が上がり、そのテープが届けられた。小椋が自らギターを弾いて歌うのを聞いた時、大方の第一印象は「暗い」「歌いづらい」ということだった。しかし、曲質そのものの良さは評価された。後退的に考えるのではなく、とりあえず、自分たちで歌ってみよう。その後原案の歌にくい箇所を小椋に率直に伝え、手直しをしてもらうことになった。6月、教職員有志が集まり、声張り上げて校歌原案を歌ってみた。涙ぐましいほどだった。

一部改作の要望も受けて編曲され、校歌は完成した。その年の9月20日、街に「天皇大量吐血、重態」の号外が舞った日、渋谷・池尻大橋のスタジオで東京混声合唱団による吹き込み、校歌の収録が行われた。

年改まり1989年、元号も昭和から平成に変わって1月9日、芝浦柏高の第3学期の始業式が行われた。整列した生徒たちは耳に飛び込んで来た斬新な曲に驚いた。校歌「毎日が喜び」が初めて披露された瞬間である。

ちなみに、1999年4月に開校した芝浦工業大学柏中学校の生徒たちが歌う校歌も、この「毎日が喜び」である。



小椋佳自筆の色紙

[2009年2月号]

史料に見る 芝浦工業大学¹⁹

(2007年2月号から始まった連載企画)

財団法人から 学校法人芝浦学園に



「財団法人東京高等工学校」
設立許可書

1950年3月15日、私立学校法が施行された。第二次世界大戦前の私立学校令(1899年勅令第359号)と異なる点は、私立学校を自主的かつ公共的なものとした点、私立学校の設置者を学校法人とした点などである。

以下は、このことを謳った私立学校法の冒頭の条文である。

- 第一条 この法律は、私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めることによつて、私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。
- 第二条 3 この法律において「私立学校」とは、学校法人の設置する学校をいう。
- 第三条 この法律において「学校法人」とは、私立学校の設置を目的として、この法律の定めるところにより設立される法人をいう。

私立学校法が施行される前、私立学校の設置者は原則として財団法人であった。今でも学校教育法の附則の規定で、学校法人によって設置されていることを当分の間要しないとする私立の特別支援学校、幼稚園を中心に、財団法人による学校の設置が見られる。

芝浦工業大学の前身、東京高等工学校が民法第34条の規定により「財団法人東京高等工学校」設立の許可を受けたのは1943年3月31日。経営の安定に向けて法人化を実現した画期的な出来事である。設立代表者は、創立者有元士郎の遺志を継いだ妻、有元ヨシであった。初代理事長には岸本綾夫が就任した。陸軍大将、東京高等工学校校長などを歴任、東京市長(現東京都知事)を務めたこともある人物である。

1943年、戦局が悪化して学徒出陣が始まり、風雲急を

告げたこの年、本学の動きも急であった。10月29日、財団法人の名前は「財団法人東京高等工学校」から「財団法人芝浦学園」に改められた。さらに同じ年、12月15日には校名も芝浦高等工学校に変わった。

敗戦を境に日本の学校教育は大きく改革される。1946年には教育基本法、学校教育法が相次いで施行された。社会変動の大きなうねりの中、新制大学が次々に誕生したが、芝浦工業大学の設置は1949年のことである。

学校法人になれば、税制上の優遇措置に加え、私学助成金などの行政からの補助も受けられる。社会的信用も増すことが期待されて、1950年の私立学校法施行を機に、多くの学校がなだれ込むように財団法人から学校法人に変わった。

附則

- 2 この法律施行の際現に民法による財団法人で私立学校(中略)を設置しているもの及び学校教育法附則第三条の規定により存続する私立学校で民法による財団法人であるものは、この法律施行の日から一年以内にその組織を変更して学校法人となることができる。
- 3 前項の規定により財団法人がその組織を変更して学校法人となるには、その財団法人の寄附行為の定めるところにより、組織変更のため必要な寄附行為の変更をし、所轄庁の認可を受けなければならない。(以下略)

この私立学校法附則により、芝浦工業大学は1950年12月27日付で「財団法人芝浦学園」から「学校法人芝浦学園」への組織変更を申請し、1951年2月27日付で文部大臣から認可された。その後、1962年4月21日付で「学校法人芝浦学園」は「学校法人芝浦工業大学」に改称されて今日に至っている。



「学校法人芝浦学園」への組織変更認可書

[2009年3月号]

史料に見る 芝浦工業大学^⑩

(2007年2月号から始まった連載企画)

望郷の 湯の丸高原寮



建築物確認申請書

長野県の浅間連峰の西に位置する湯の丸高原。春から秋にかけては百花繚乱、「花高原」として親しまれている。中でも、初夏6月下旬、国の天然記念物であるレンゲツツジの大群落が一斉に開花した光景は目を見張る。湯の丸山の山肌は鮮やかな朱に塗られる。また、冬の降雪期、上質のパウダースノーに恵まれる湯の丸のゲレンデは滑りやすく、多くのスキー客で賑わう。その標高1725.75mの地に、芝浦工大で初めての研修・保養施設として建てられたのが湯の丸高原寮である。

1964年5月6日付の建築物の確認通知書によると、同寮の建物延床面積は476.87㎡。用途は山小屋、構造は1階がブロック造、2階が木造の2階建。新築工事である。芝浦工大の歴史を記録した年表『50年のあゆみ』(1977年11月4日発行)には、1964年の項に「10月4日 長野県に湯の丸高原寮落成」と記されてある。初めて利用者を迎え入れたのは同年12月のことである。星霜45年、多くの学生・生徒、卒業生、教職員が利用して思い出を残し、芝浦人の望郷の念誘う寮となった。

その湯の丸高原寮が2009年3月で廃寮になる。折にふれ改修整備を重ねたものの、長い年月、降雪地帯の厳しい自然環境にあって施設の老朽化が進んでいること、利用対象者の嗜好の変化もあって近年は訪れる人の数が大きく減少していること、そして、利用者の世話をしてきた管理人夫婦が定年退職することが廃寮の理由である。

現在の寮の管理人、柳沢勝興^{かつおき}さんは2代目。1968年12月に初代の児玉良人^{よしと}さんから引き継いで以来、奥様の加奈子^{かなこ}さんとともに芝浦工大の職員として7室、定員42名の寮を切り盛りしてきた。寮長として、学生たちに共同生活のルールを説くこともあったと勝興さんは話す。研修の場だからこそ、あるべき姿を伝えておかねば、という思いからである。

勝興さんから湯の丸の魅力聞いた。春、カラマツの新芽^{もみぎ}の萌黄色が山すそから広がり、上がっていく。秋は逆に、山の上から紅葉が染め下ろしてくる。季節の移り変わり時、得も言われぬ景色に見られるという。冬、湯上がりに振り回したタオルがそのまま凍って硬直するという厳しい寒さについても、どこか楽しげに語ってくれた。



1974年ごろの湯の丸高原寮

寮がなくなることを知って名残惜しく思う人は少なくない。その一人、湯の丸高原寮がオープンして間もないころから利用してきた中澤重夫^{しげお}芝浦工大名誉教授(土木工学科)が昔日を懐かしく振り返り、エピソードを紹介してくれた。今とは異なり、ろくな暖房設備もなかった。すき間風の吹き込む部屋は、吹雪の夜が明けた朝、枕元が白くなっていたという。卒業研究に取り組む中澤ゼミの学生たち、測量学の校外実習をする土木工学科の学生たちには湯の丸の山が現場となり、集中的に勉強する所であったと、教育の場としての意義を強調した。

1986年ごろ、寮の廃止が提案されたことがあったが、学内で強い反対の声が上がり、存続することになった。そうして積み重ねてきた湯の丸高原寮45年の歴史も、2009年5月10日の閉寮式で幕を下ろす。土地(2,192㎡)は国有地を借りたもの。廃寮後は建物を解体、撤去し、跡地に植林をして国有林野に戻すことになっている。

燃えさかる炎から 芝浦を守ろうとして

太平洋戦争末期の1945年5月25日、470もの米軍機が飛来して東京を空襲。この夜、芝浦一带は炎の海と化した。芝浦工大の前身、芝浦高等工学校および芝浦工業専門学校も空爆にさらされ、かろうじて芝浦校舎の鉄筋コンクリート4階建ての本館は死守したが、木造3階建ての校舎は全焼した。

日本の敗色濃くなる中、大方の学生は遠方の軍需工場などへ勤労奉仕に駆り出されていた。芝浦校舎の防衛に当ることのできたのは少数の教職員、学生でしかなかった。

当夜の様子が、その時校内にいた三浦元秀教授が著した『雑草2(補)』(1970年12月5日発行)掲載の「焦土と化した芝浦地区」に詳しく記されている。長い引用になるが、表記を原文のままに紹介する。

(略) 当夜本学の防衛の任に当たった教員は私の他に体育教員一名、学生30名で、19時所定の点呼をおわって交替仮睡に入ったのであったが、21時警戒警報に追討ちをかける空襲警報が慌しく発令されるに至った、本学においても非常呼集を行ったが、これに応じた学生は僅かに三名で総員五名とってしまった。(略)

沖電気を中心とする焼夷弾の乱投によって火災は見る見る内に拡大し、まき起る風力を強めつゝ本学方面に殺到し来たった。その一つは本学南西側旧称十間道路対側の一連の木造二階建三階建の商店をなめ盡すに及んで、十間道路は火の川と化して田町駅にだれ込んでいった。他方火力は本学東南方にも延び本学を迂回して、瓦斯タンクの方から国鉄路線を超えて田町方面に延びていったので、本学は火災に包囲され旧本館の火災防衛に専心している間に木造三階建校舎をみすみす火災に任せざるを得なかったのである。(略) 空襲時余にして本学旧本館には交錯した警報に狼狽した、荷を負い子供の手をひいた家族が少なからず避難し来り、本学旧本館の引火性は高まり避難者の危険も増大するに至ったので、声を大にして海岸方面

風上への再避難を力説し誘導に成功した。従って旧称十間道路側木造二、三階建商店が類焼、焼落ちつゝある段階において校舎の窓硝子は亀裂し、炎のあおりをうける度に亀裂と剥落は加はり、窓に設備されていた大防空暗幕は発煙し、屋内温度は上昇し、発汗、息切れを来す状態となったので、暗幕には三名の体重をかけてちぎり落として水湿し、机上面にも散水を加えた。洗面所の給水は三階以下であるが一階以上四階にわたり五名の馬穴リレーによって散水を果した。

給水と貯水を使い果し、時に水をかぶり、床面溜り水に転身して水湿するなど二時間余りの闘いであった。(略)

燃えさかる炎との壮絶な闘い、「芝浦」を守り抜こうとした人たちの命がけの行動である。その功あって、芝浦校舎の本館は命拾いしたのであった。

数日後、焼け跡に片付けに来た卒業生の一人、岡上忠夫さん(1947年芝浦工業専門学校土木科卒業)によると、見渡す限りの焼け野原、田町駅のホームからも本館が見えたそうである。周りに何もなく、本館だけがぽつんと残っていたという。

空襲の夜、陣頭指揮した三浦教授に身近に接したことのある卒業生、木川昭司さん(1947年芝浦高等工学校工業化学科卒業)は「先生は四六時中、芝浦のことを考えておられた。奥さまと愛犬と一緒に暮らしていたが、先生のお宅には常時、芝浦の学生数人が居候していた」と思い出を語る。

1972年10月から5年4カ月余、三浦先生は芝浦工大理事長を務めた。1978年3月20日に逝去して(享年80)、今は築地本願寺和田堀御廟(東京都杉並区)に眠っている。



愛犬とくつろぐ在りし日の三浦教授



『雑草』(1969～1970年刊行)

史料に見る芝浦工業大学②

(2007年2月号から始まった連載企画)

懸け橋となった 付属第一高等学校



生徒会誌「躍雲」(1976～1984年発行)

かつて芝浦校舎の狭い校地に、大学、短大、高校の3つの学校がひしめき、折り重なるように存在していた。その一つ、芝浦工業大学付属第一高等学校(付一高)は、芝浦工大の前身である東京高等工学校の併設校、東京高等学校附属普通部(1930年設置)を起源とする学校だった。

学校は変遷を続け、東京高等工学校附属工科学校、芝浦高等工学校附属工科学校、芝浦工業学校、芝浦中学校、芝浦高等学校、と校名変更も度重なり、1954年に芝浦工業大学工業高等学校(工業高校)となった。

その工業高校も時代の流れから1974年4月、工業科の生徒募集を停止して普通科を設置。翌1975年、校名を改め、普通科の高校、付一高が誕生した。初代の校長は鴨井光夫芝浦工大教授である。1年後の1976年4月には都立高校校長だった佐々木勤次郎先生が付一高校長に迎えられた。

学校法人としての動きはさらに加速する。1978年4月、付属高校総合計画本部が設置された。併設の芝浦工大高校の池袋校地に対する国鉄(現JR)からの返還申し入れを受けて、その移転対策と芝浦校舎の整備にも関連する付一高の処遇とをどうするか、同本部は学校法人の抱える難問に立ち向かった。

折しも、高校増設の必要から、千葉県が私立高校の誘致に積極的で、学校の建設に補助金を交付するという朗報が届いた。付一高の移転の大きな手がかかることが期待された。ただ、補助金交付の対象は千葉県内に新設する学校に限られていた。芝浦工大

の理事会は、検討の結果、移転ではなく、「新しい高校教育の創造という観点からの新設」ということで決断し、高校の新設を決定した。

芝浦工業大学柏高等学校(柏高校)の開設に向けた取り組みが本格化する。1979年2月、千葉県知事から柏高校の設置計画の承認が下り、同年7月には開設準備事務所が設置された。付一高校長の佐々木先生が所長に就任、ほかにも次長1名、所員7名、計8名が付一高の教諭と兼任した。翌1980年、柏高校が開校し、初代校長には佐々木先生が就任した。初年度の専任教員14名のうち10名が元付一高教員であった。

付一高が閉校したのは1985年3月のことである。最後の校長を務めたのは榑原秋策芝浦工大教授であった。卒業生は1,880名を数える。付一高の教室のすぐ隣が大学の教室や研究室といった校舎構造、グラウンドもない窮屈な生活空間、「朽ち果て行く博物館」と評されたこともある老朽化した建物の中で生徒たちは多感な高校生時代を過ごした。付一高の刊行物、生徒会誌「躍雲」や教員による研究紀要「實語」に目を通すと、そうした教育環境の中、流れに抗うように生きた人たちの営みがうかがい知れる。

付一高ではユニークな授業が行われていた。「工学基礎」と「ロシア語」である。前者は、実習や実験を中心にした体験学習を通して工学の基礎を修得させるもの。工業大学の付属高校として、現代的課題である「高大連携」の萌芽の取り組みをしたと言えなくもない。後者は、英語に次ぐ第二外国語としてロシア語を採択したもので、他校にほとんど例を見ない外国語教育が行われていた。それらは、工業科から普通科に舵を切った学校で教育の実践をする者として、風前の灯となった職場で働く自分たちの存在意義を確かめ、独自性を発揮しようとした教員たちのささやかな試みであったように思われる。



教員の研究紀要「実語」
(1976～1978年発行)

史料に見る芝浦工業大学②③

(2007年2月号から始まった連載企画)

旧芝浦校舎の上棟札

建物の新築の際、骨組みが完成して棟木を上げる時に行われる神道の祭祀が上棟式である。棟上、建前などともいう。神を祭って、工事の安全と新築した建物に災いなく、幸いあることを祈願して行われる。上棟札はその式で使用される建物の護符である。

70年余りに建てられた旧芝浦校舎の上棟札が保存されている。高さ73cm、幅は最長部が23.7cmの木札である。表には、上に大きく「奉^{ほう}上^{じやう}棟^{とう}」とあり、中間に右から「手置帆負命^{たゝねおののみこと}」、「天思兼命^{あめのおもいかねのみこと}」、「彦佐知乃命^{ひこさしりのみこと}」、その下に続けて「守護^{しゆご}祈^{いのり}敬^{けい}白^{はく}」と墨書きされている。裏には、右側に「東京高等工学校々舎建築主有元史郎」、中央に大きく「維持昭和十年十月十二日建之」、左側に「工事請負 戸田利兵衛」と書かれている。(文中敬称略)

上棟札に書かれた三柱の神のうち、天思兼命は多くの神々の知恵と思慮を一身に兼ね持つほど知謀にたけた神である。天照大御神が天の岩屋に身を隠し、世界が闇に閉ざされた時、八百万の神は思兼命の知恵に救いを求めた。

思兼命は思金命とも記す。「カネ」は最も大切な大工道具の一つとされている曲尺の「カネ」に通じる。ここから、思兼命が上棟式で行われる手斧始めの主神となり、八方に思慮分別を要する木匠の守護神の第一座となったと言われる。

手置帆負命と彦佐知乃命は共に材木を伐り、天の岩屋から出た天照大御神を迎える宮殿を造営した故事により、今日でも上棟式の祭神となっている。

芝浦校舎の敷地・建物は、1932年から1937年にかけて急速に拡張された。1935(昭和10)年に竣工したのは旧芝浦校舎本館の第1期工事(西側部分)。鉄筋コンクリート造4階建て、暖房完備の近代的校舎であ

る。建築工事を担ったのは当時の戸田組、現在の戸田建設(株)である。

1935年、旧芝浦校舎本館建設の年、建築主の有元史郎は39歳、請け負った二代目戸田利兵衛は49歳。二人はこの本館建設の前後に、取り組む事業の隆盛期を迎えた。

芝浦工大の創立者、有元史郎は工学に止まらず、知的関心を多方面に向け、経済学、法学、商学、文学をも学び、合わせて5つの学士号を取得した。向学心旺盛な人である。有元が開校した芝浦工大の前身、東京高等工学校は、1933年11月に盛大な創立八周年記念祭を開催。1937年4月には学生数1万人とも言われ、最盛期を迎えた。

一方、戸田利兵衛は、1886年、富田繁秋として出生。初代の戸田利兵衛に懇請され、養子として戸田家に入籍。1920年、初代の死去に伴って二代目を襲名し、戸田組社長に就任した。戸田組の近代化を促進し、戸田建設の基盤を築いた人である。

経営者、財界人として功なり名とげてから、60代半ばに絵画を始め、絵の道に勤しんだ。また、バラ栽培を始め、花づくりにも熱中した。秩父官邸や高松宮邸に呼ばれて剪定を指導するほどであったという。

このような二人に親交があったかどうか、興味のあるところだが、旧芝浦校舎本館の建築主と施工主として上棟札に名を並べるといふ関係以上の交誼については定かでない。

2009年3月24日に竣工した新しい芝浦校舎も戸田建設(株)が施工した。ちなみに、2008年5月30日、「芝浦キャンパス新大学棟新築工事」の上棟式が行われた。その上棟札には「建築主 学校法人芝浦工業大学」、「施工 戸田建設株式会社 東京支店」とあり、札のどこにも人の名は書かれていない。



上棟札(表)



上棟札(裏)

史料に見る芝浦工業大学②④

(2007年2月号から始まった連載企画)

ロボットセミナーの 歩んできた道

6月27日、日本科学未来館(東京都江東区)を会場に「東京ベイエリアロボフェスタ」が開催された。「ロボットを通じた次世代人材育成を考える」をテーマにした芝浦工大と日本科学未来館の連携による一大イベントに多くの人が訪れた。イベントの一環として、ロボットの製作を通して子どもたちにモノづくりの楽しさを知ってもらおうロボットセミナーが行われ、盛況であった。

ロボットセミナーには前史がある。1984年、東京都港区教育委員会から小中学生向けの講座の開講依頼があり、「やさしいロボット教室」が開かれることになった。担当したのは芝浦工大でロボットの研究をしていた佐藤 晟先生(元機械制御システム学科助教授)である。佐藤先生は、当時、道具の使い方を知らない学生に接して、「モノづくりを体験する機会が減っている。小学生のうちから体験させることが必要」と考え、講師を引き受けたという。

1997年には芝浦工大創立70周年記念事業の一環である「全国縦断ロボットセミナー」が、校友会の協力を得て、全国13カ所で盛大に開催された。これが布石となって、後年、ロボットセミナーをユニークな出張公開講座として各地で催すことが企画される。

2000年の夏、全国9カ所で小中学生ロボットセミナーが開催された。2000年7月17日付の朝日新聞に掲載された記事「最強のロボを手作りしよう 芝浦工大が全国でセミナー」は大きな反響を呼んだ。問い合わせの電話が3日間ひっきりなしにかかってきたという。



朝日新聞記事(2000年7月17日付)

いまや、毎年約30カ所、約1,200人の参加を得てロボットセミナーは実施されており、受講生も2009年4月には延べ1万人を突破した。セミナーの歴史は、佐藤先生、春日智恵名誉教授、水川真工学部長・電気工学科教授をはじめとした芝浦工大でロボットに取り組む先生たちの貢献に加え、陰で盛り立ててきた人たち抜きには語れな

い。冒頭の「東京ベイエリアロボフェスタ」開催時に配られた記念冊子がある。その中の「ロボットセミナーの10年



セミナー開催風景(2000年8月 千葉県柏市) 中央が故河村企画部長

間を振り返る」をテーマにした座談会で佐藤先生は、「河村さんという傑物がいなければ、今日のロボットセミナーは無かったでしょう」と発言している。

ロボットセミナーの実現に力を傾注したのが故河村憲二企画部長(当時)である。1998年、芝浦工大に入職した当時、大勢はロボットセミナーの実施に消極的であった。河村さんはそこに次代の科学技術を担う人材の育成という社会貢献の意義を見て取り、さらに芝浦工大のアピールにもなると考えて周囲の理解を得ることに努めた。セミナーの実施経費に当てるため、彼の人的ネットワークを総動員して外部の補助金獲得にも奔走した。

河村さんの考えに賛同し、パートナーとなったのが、芝浦工大の関連会社、(株)エスアイテックの専務であった金井貞晴さん。教材キットの製造販売、在庫管理、さらにはセミナーの実務を担う人材提供などを一手に引き受け、セミナーの全国展開の土台を固めた。

ロボットセミナーが全国展開を始めたころの生涯学習事務課長、椎名博俊さん(現在、募金課長)は『大学時報』2002年7月号(日本私立大学連盟発行)に、「大学が次世代の子どもたちに実習体験の機会を提供し、底辺を広げることが技術立国日本を成り立たせる」という主旨の文を書いている。セミナーの興隆に尽力した一人として得た実感であろう。

「東京ベイエリアロボフェスタ」開催時、会場には年を追ってセミナーの実施風景の写真パネルが展示された。2000年から10年、セミナーの開催実務を担ってきた生涯学習課の菅野仁悦さん(1959年機械工学科卒業)は、ずらり並んだパネルにしばらく目をやっていた。彼にとって、それは、ロボットセミナーに取り組み、積み重ねてきた日々を「歴史」として反芻する時間であったか。

史料に見る芝浦工業大学②

(2007年2月号から始まった連載企画)

ガリ版刷りの卒業証書



甲良さんの成績証明書

8月の暑さは日本が戦争に敗れた年の夏に思いをはせさせる。1945年8月15日、終戦の日から64年が経過、戦争の渦中にいた人で、その体験を語り継げる人が少なくなってきた。

甲良良三さん(芝浦高等工学校機械工学科1945年卒業)は、1939年に東京高等工学校附属工科学学校機械科に入学、東京高等工学校予科を経て、1943年4月に東京高等工学校(同年12月に芝浦高等工学校に校名変更)に入学した。1年次(1943年度)は、学徒戦時動員体制下ではあったが、授業は行われた。甲良さんの成績証明書を見ると、科目欄に「英語」や「工業英語」がある。敵対国・交戦国の言語、「敵性語」として排斥運動の強かった英語が授業科目として設けられていたことは興味深い。

戦局の悪化につれ、学生たちが勤労動員に出されることが多くなり、2年次途中から授業は行われなくなったという。3年次、甲良さんは1945年5月から8月まで、宮城県の大賀城に海軍の銃器・火薬類の生産増大を目的に建設された海軍工廠に勤労動員で送り込まれた。8月、戦争が終わって横浜の実家に帰ったが、学校に行くことなく、9月にそのまま繰り上げ卒業となった。

甲良さんとは東京高等工学校附属工科学学校入学時から同期の後藤勝治さん(芝浦高等工学校機械工学科1945年卒業)も大賀城の海軍工廠に送り出された。来る日も来る日も旋盤で20mm機関砲の銃弾製造作業に明け暮れ、敗戦を迎えた。家に帰っても、学校の授業はない。不安を抱えながら過ごしていた折、3年生は9月に繰り上げ卒業になるという話が耳に入ってきた。後藤さんは半ば救われる思いでその卒業式に出席。その時に受け取った卒業証書を大切に保管してきた。

卒業式は1945年9月29日に挙行された。その4カ月前、5月25日の大きな空襲で芝浦校舎の大方は焼失した。唯一残った本館の4階にあった講堂が式場になったが、敗戦直後の混乱期、卒業式開催の知らせが学生たちに行き渡ることは難しかった。事実、甲良さんは卒業式が行われたことを知らず、出席できなかった。それでも、式当日、講堂は大勢の人でいっぱいになったと出席した人たちは口をそろえる。イスはなかった。誰もが立ったまま式に臨んだという。卒業証書を授与したのは松縄信太校長事務取扱である。出席者の一人は、松縄先生が「君たちは就職が大変だが、頑張ってください」とあいさつしたことが強く印象に残っていると語った。

卒業証書は、式場ではクラスの代表がまとめて受け取り、式の後、クラスごとに分かれ、そこで一人一人が自身の証書を手にした。その折、併せて海軍工廠から勤労動員の学生たちに対し、慰労の言葉に添えて毛布も贈られたと、後藤さんは思い出を披露してくれた。

卒業生に渡されたのはガリ版刷り(正式には謄写版印刷と呼ばれる。孔版印刷の一種)の卒業証書。物資の欠乏した当時、手作りの証書である。後藤さんが大切にしてきたものを見ると、周りの飾り罫の緑色が今も鮮やか。インクの調合をはじめ、印刷技術に優れ、丁寧に作られたものである。現在、その卒業証書は芝浦工大豊洲校舎に歴史的資料として展示されている。

64年前、学生と教職員が共に抱いたのは、卒業式を機に敗戦による虚脱感、憔悴から立ち上がろうとする気持ちではなかったか。卒業証書はどのようにして作られたのだろう。卒業式を間近にした日、証書を手にした学生の晴れがましい表情を思い描きながら鉄筆で原紙を切る人の姿を想像してみた。



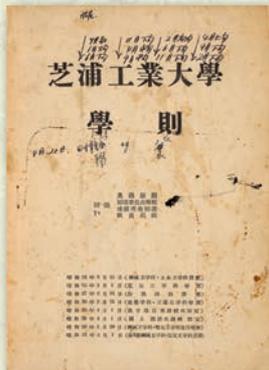
後藤さんの卒業証書

史料に見る芝浦工業大学②⑥

(2007年2月号から始まった連載企画)

26回目は元芝浦工業大学助教授、田中潤一先生からの寄稿です。

工学部二部の軌跡



芝浦工業大学学則(1956年度)
上部に12期の試験実施スケジュールの
書き込みがある

1956年4月、芝浦工大は工学部二部(5年制)を開設、電気および機械工学科の第1期入学生を迎えた。各学科40名定員である。既設の芝浦短期大学の修業年限不足による教育成果の不満の解消、さらに真の教育を目指して設立。特徴は5年制、12期で構成されたことである。カリキュラムは「識見ある、真の技術者を養成し、工業立国に貢献する」を目的に編成された。一般教育科目36単位、語学16単位、体育4単位、専門科目84単位以上、合計140以上が卒業必要単位数である。演習、実習、実験、設計製図、卒業論文などの必修単位数は電気24、機械15。実技科目の比重が大きいことが挙げられる。芝浦工大中興の祖、松縄信太学長、岩竹松之助次長の指揮の下、教授陣は実務に明るい先生や実技関係科目担当の若い先生たちであった。

当時はナベ底景気とよばれた不況期。企業などの技術者養成も未熟な社会環境であり、新制の義務教育を受け、目的意識を持つ知識欲旺盛な若者にとって二部は魅力的な向学の間であった。時代も技術の变革期に直面(例えば真空管技術がトランジスタ技術に変革)していた。カリキュラムもコース選択の自由度も持ち、豊富な内容へと改編も随時進められていた。チャレンジ精神にあふれた社会の高揚した気分もあいまって二部は盛況。1965年前後の芝浦工業大学は東都大学リーグにおける野球部の優勝など、隆盛期にあった。二部学生は就業者が多数を占めていたが、時間を有効利用し、クラブ活動も盛んであった。

1977年度の二部卒業生数は2学科合計235名、開設以来最多となった。しかし、1970年代は大学紛争の波にさらされる。学生から大学に対して芝浦工大の民主化要求が突き付けられた。二部は自治会組織の「クラブ連合」が中心になり、二部軽視問題とし

て、二部学生の教育環境改善の要求を出した。その結果、沖種郎学長、藤井正一学長と継続して学長室直属の「二部検討委員会」が置かれ、その対応策が検討される。カリキュラムから運営組織に至るまで多岐にわたる改革がなされた。

1980年代、二部学生に変化が表れる。就業者の割合が減少し、学生気質も一部との違いなど、独自性が薄れ、大学院への進学者が出始めた。働きながらも学ぶ意識の低下などから入学生が減少し、学力の低下も深刻化した。各年度両学科の卒業生が100名に達しない状況下、こうした問題の解決に二部の教職員はまさに昼夜を問わず奮闘した。5年制から4年制へのカリキュラム改編、有職者の入学制度の検討など、教員組織にまで及ぶ変革があった。電気工学科の教員の二部専任の交替制、小論文や面接による入試などが実施に移される。低迷期ではあったが、先生たちの地道な努力により、二部の廃止は免れた。

1995年、二部は4年制へ移行する。同時に、建築物の電気設備技術の高度化に対応して、建設系と電気系、二つのカリキュラムをコース制とした電気設備学科が新設され、3学科体制となる。しかし、2000年を境とし、急激に志願者が減少する。2008年3月、二部は最後の卒業生を送り出し、幕を閉じた。半世紀の歴史で7,502名(電気3,207名、機械3,837名、電気設備458名)の卒業生がいる。現時点の芝浦工業大学卒業生総数の11%である。



二部5年制開設を伝える「芝浦工大新聞」
第16号(1956年6月18日刊)

史料に見る芝浦工業大学②⑦

(2007年2月号から始まった連載企画)

シバヤから芝屋に かく生まれ、かく来たる30年



『芝浦祭史』(2005年11月発行)

毎年恒例、芝浦祭のフィナーレを飾るのが「芝屋」。「しばや、しば～や」、ステージの演奏に大声で熱狂的に呼応する客席。芝浦祭の顔とも言われる光景である。

1986年、第14回芝浦祭実行委員長を務めた大竹昇司さん(1990

年金属工学専攻修了)が中心になってまとめた冊子『芝浦祭史』(2005年11月発行)がある。それによると、1973年、芝浦祭は学生たちの主体的な取り組みから始まった。芝屋は、学生自治会の提案を受けた芝浦祭実行委員会からの依頼により、学園祭のお祭りバンド「シバヤ」として誕生した。1979年開催の第7回芝浦祭の時である。

その年の秋、山崎真一郎さん(1981年工業経営学科卒業)をリーダーに、軽音楽同好会の有志が集まって「シバヤ」を結成。学園祭を盛り上げるテーマ曲を作してほしいという求めに応じた。総勢8人が当時、大宮キャンパスにあった学内寮のメンバーの1室に集まり、興に乗るまま、ほぼ1晩で作詞、作曲。ファンキーな曲調の「てめ～ら」とサンバ風の曲「チバヤ・シバヤ」の2曲が生まれた。後者は正体不明の歌詞を「アフリカに住む先住民『オモロ族』の言語」と称した遊び心の産物。逆さ読みの倒語を利用して隠語を散りばめたものである。

当時は芝浦祭の前夜祭として大宮祭が開催された。初代メンバーの一人だった岡田賢治さん(1984年建築工学科卒業)は、大宮祭の外ステージで行われた「シバヤ」の初ライブはすごかったと語る。大宮祭の最後とあって、メンバーは大量に飲酒、肩車をされながら演奏し、肩車している者は踊っているという状態。できたばかりの持ち曲の2曲を繰り返すだけ、30分以上演奏した。今も続く掛け声の「しばや、しばや」は、場を持たせるための即興であった。

その後、メンバーは交代していった。曲を正確に伝える楽譜はなかった、というより、持たないことが当初からの方針だった。時代の変化に応じて原曲を少し

ずつアレンジ、折々に新曲を加えながら、「シバヤ」は続いていった。そして、前出の『芝浦祭史』によると、1993年、第21回芝浦祭あたりで「シバヤ」の表記は「芝屋」に変わった。

芝浦工大生だった兄のつながりから「シバヤ」にかかわるようになり、1984年の第12回から今年、2009年の第37回の芝浦祭まで、PA (Public Address:コンサートなどの音響システム)を担当してきた五井潤実さんは「シバヤ」から「芝屋」に移り変わる営みを見守ってきた人である。彼自身も数年は芝浦祭のステージに立ったことがある。演奏する者も観客も生き生きとした表情、飛び跳ねる人たちで地鳴りがしたことも体験した。ステージと客席の交歓のさまを五井潤実さんは「異体同心」と表現した。曲がシンプルで覚えやすく、入りやすい「タテのノリ」が相互の交流パワーと「温故創新」の継続力を生み出してきたのではないかという。

2009年11月1日から3日間、新型インフルエンザが猛威を振るう中、危機を乗り越えながら豊洲校舎で開催を全うした第37回芝浦祭。実行委員の一人、芝屋局長の大貫慎也さん(電気工学科4年)は、自分たちも「芝屋」の盛り上がりを作り合えたと喜びを語った。

彼は旧芝浦校舎での「芝屋」を体験していない世代である。老朽化した建物に囲まれた狭苦しい旧芝浦校舎で、かつて「シバヤ」や「芝屋」は時に酒の勢いも借りて学生たちに「ガス抜き」の場を提供した面がある。今、豊洲校舎の最新設備の建物、広くて開放的なキャンパスは異質の環境である。

祭りは非日常である。日常の中に非日常を具現しようとして人は祭りにひかれる。学園の祭りのあり方も時代・社会とともに変わっていくが、この本質は変わるまい。芝浦工大でも、豊洲校舎で、ご時勢から飲酒の規制はあっても、束の間に非日常に遊ぶ試みは可能ではないか。代々引き継がれ、生々流転、30年も続いてきた「芝屋」の曲に宿る不思議な力を助けに。



「芝浦工業大学校歌 芝浦祭テーマ・ソング」CD (1995年 芝浦工大学務部厚生課企画・発行)

史料に見る芝浦工業大学⑳

(2007年2月号から始まった連載企画)

芝浦工大初の理事長にして最後の東京市長 陸軍大将 岸本綾夫

芝浦工大の前身校、東京高等工学校の法人化は1943年のことで、財団法人東京高等工学校が設立された(本誌2009年2月号「史料に見る芝浦工業大学⑱ 財団法人から学校法人芝浦学園に」参照)。初代理事長に就任したのが岸本綾夫である。岸本は1943年4月から1944年2月までこの法人の理事長を務めた。

芝浦工大の歴史を記録した年表「50年のあゆみ」によると、大日本帝国陸軍大将の岸本が東京高等工学校総長に就任したのは1937年4月。1938年5月、芝浦工大の創立者であり、当時の東京高等工学校校長であった有元史郎が急逝。跡を受けて、同年6月、岸本が校長に就任した。さらに、岸本は有元亡き後の学校の経営母体となった学園会の第1回理事会会長も務めている(1938年9月～1943年4月)。この学園会が冒頭の財団法人の設立に取り組んだのである。

1937年7月には日中戦争が、1939年9月には第2次世界大戦が勃発。そして、1941年12月、日本が太平洋戦争に突入した激動の時代である。当時の大方の学校がそうであったように東京高等工学校でも軍事教育が行われ、学生は連日、軍事教練で鍛えられた。学校幹部には軍人が名を連ね、当時の卒業アルバムには、岸本をはじめ、多くの軍服姿の教員の写真が収められている。

1942年8月、岸本は校長在職のまま第19代東京市長(現東京都知事)に就任。東京市が都制に変わって東京都になる前、1943年6月まで、最後の東京市長を務めた。この間、一時的に校長職から離れ、後に復帰したものの、1944年3月には名誉校長となり、同年10月に辞任。同じ月、満州製鉄株式会社の理事長に就任して中国に渡った。1945年8月、日本が敗戦。同年11月28日、満州に残っていた岸本は八路軍(日中戦争時の中国の軍隊組織)に連行されたまま、不帰の客となった。

岸本の波乱の人生で、芝浦工大とのかかわりはど

のようにして生じたのだろうか。

岸本は陸軍士官学校を出た後、通例の幹部養成の陸軍大学校には進まず、帝国大学派遣学生として東京帝国大学工学部造兵学科に入学、卒業した。陸軍では技術者が軽視されていたと言われるが、岸本は技術畑一筋に進み、1936年8月、陸軍大将となる。日露戦争にも従軍し軍功をあげており、学力も最優秀の人材とはいえ、異例の昇進であった。技術者の地位向上に力を傾けた有元が岸本を自らの学校に招くことを強く望んだであろうことは想像に難くない。

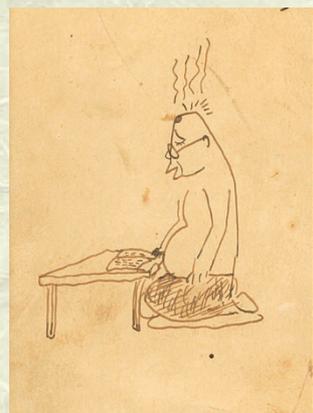
私人としての岸本にはほほ笑ましいエピソードがある。岸本の趣味は散歩と謡曲。毎朝、桐の下駄を履いて家の近所を歩き、子どもたちにも気さくに声を掛ける人であった。もう一つの趣味、謡曲の稽古をしている岸本を活写した書画が残されている。1937年か1938年、千葉県の保田に避暑中の岸本が上半身裸でうなっている。2009年8月に他界した長男の

岸本太郎(元三菱銀行常務)が父親を描いたものである。当時、東京帝国大学法学部在学中の息子に対して父は「お前は大学で漫画を習ってくるのか」と笑っていたと添え書きにある。親類に漫画家の手塚治虫がいる。岸本太郎と手塚治虫は従兄弟の関係。軽妙なタッチを、さすが、と思うは色眼鏡のなせるわざか。息子が父を思い、父が息子を思う、ほのほとした情感が漂ってくる絵である。

(文中敬称略)



岸本綾夫初代理事長

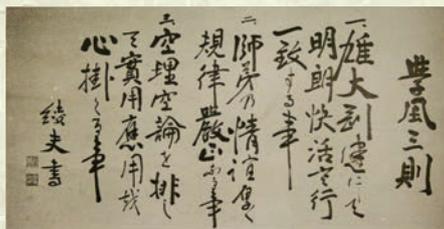


岸本太郎氏が描いた父親のスケッチ

史料に見る芝浦工業大学②

(2007年2月号から始まった連載企画)

学風三則



岸本綾夫の書「学風三則」(1941年卒業アルバム掲載)

芝浦工大の前身、東京高等工学校の卒業アルバムには、1940年から1943年まで、本学の初代理事長、岸本綾夫揮毫の「学風三則」の写真が掲載されている。

学風三則

- 一、雄大剛健にて明朗快活言行一致する事
- 二、師弟の情誼厚く規律厳正なる事
- 三、空理空論を排して実用応用を心掛くる事

東京高等工学校のあるべき校風、その生徒として心掛けるべきことが謳われている。

「学風三則」について、写真が掲載されたアルバムの当時を知る卒業生に照会した。山下市太郎さん(1943年東京高等工学校機械工学科卒業)は1938年に東京高等工学校附属工科学校に入学。毎朝、授業の開始前、全学科で教室ごとに生徒たちはこの「学風三則」を唱えた。号令が掛かり、生徒全員が起立して直立不動の姿勢を取り、大声で唱和したという。ただ、この光景は附属工科学校だけで見られたこと、続く進学先の予科や東京高等工学校では「学風三則」の唱和は行われなかった。付記しておくこととして、山下さんが同期生に確かめたところ、異口同音に、暗唱した1番の冒頭は「雄大剛健」ではなく「質実剛健」であったという。

後藤勝治さん(1945年芝浦高等工学校機械工学科卒業)は1939年に東京高等工学校附属工科学校に入学した。山下さんと同様、附属工科学校に在籍した3年間、毎朝、「学風三則」を唱和した。各教室には黒板の上、中央に「学風三則」の大きな額が掲げられていた。横2m、縦50cm余りだったと後藤さんは記憶している。今でも口をついて出てくるという三則の1番の始まりは「雄大剛健」であったという。文言が「質実」から「雄大」に改まったことが考えられる。1943年、東京高等工

校は芝浦高等工学校に校名変更した。後藤さんは同校に進学したが、そこでの三則の唱和はなかった。

後藤さんとは同期、東京高等工学校附属工科学校入学から芝浦高等工学校卒業まで同じ学科で共に学んだ甲良良三さんは、三則の唱和とは別に、「朝日に輝く風と潮」で始まる校歌を斉唱した思い出も語ってくれた。

生徒たちが唱和する様子から、戦前や戦時中に天皇制国家の思想、教育の基本理念を示した教育勅語を連想させるが、「学風三則」の文言はそれとは趣きが異なっている。東京高等工学校ならではの教育の独自性が感じられる。

興味深いのは、三則の随所に、芝浦工大の校歌にも用いられている言葉や類する表現が見出されることである。校歌の1番の歌詞「雄大 空あり 雲は移る」、2番の「剛健 矩あり 常に鍛ふ」、「行へ ほがらに 澁刺たれや」、「師弟の純情 一に依りて」、3番の「夢むな空理の 漠々たるを」には三則に通じるものが感じ取れる。

校歌が完成したのは1941(昭和16)年。作者北原白秋自筆の原詩には「昭和16年10月20日作」と記されている。白秋が5年にわたる闘病生活の末に亡くなった前年のことである。制作を依頼したとされる本学の創立者、有元史郎は1938年5月に他界している。一方、岸本綾夫は、1937年4月に総長に就任、1938年6月に校長に就任、1944年に名誉校長を辞任するまで東京高等工学校の運営に携わった。

1941年の卒業アルバムまで、有元作詞の「巨鯨潮吹き」で始まる東京高等工学校初の校歌が掲載されているが、1942年のアルバムから白秋が作詞した「朝日に輝く」の校歌に代わる。

「学風三則」はいつ作られたか。有元と岸本、白秋の3人にどのような交わりがあったか。そして、白秋は「学風三則」から着想して校歌を作詞したのかもしれないと思いを巡らす。興味は尽きない。

(文中一部敬称略)



「学風三則」の額が掲げられた教室(1941年卒業アルバム掲載)

史料に見る芝浦工業大学③⑩

(2007年2月号から始まった連載企画)

校歌は世につれ

芝浦工大の校歌は、当初、前身校である東京高等工学校の校歌として作られた。作詞は北原白秋、作曲は山田耕筰、希代の名コンビの手になる。

歌詞は1番から3番まである。それぞれの内容から、「朝日に輝く風と潮」で始まる1番は新生を、「世紀に脈打つ熱と理性」の2番は在学学生を、3番は学業を終えて社会に巣立ちゆく学生を意識した作歌ではなからうかとも言われる。

3番の冒頭は「永遠に栄ゆく」。このくだりを白秋自筆の原詩に当たると、「東亜に栄ゆく」となっている。変更された事情を推し量る。

校歌が完成した1941年。この年12月に日本はアメリカに宣戦布告し、太平洋戦争が勃発した。

戦時下、日本がアジア支配の大義名分として掲げていたのが「大東亜共栄圏」。欧米の植民地支配に代わって日本を中心に、満州（現在の中国東北部）・中国・東南アジア諸民族の共存共栄の新秩序を樹立するという構想である。当時の日本に広く深く根を張った言葉でもある。

「とうあに さかゆく」と歌われた一節には「大東亜共栄圏」が影を落としていたと思われる。事実、1942年に亡くなった白秋の遺作と目される『大東亜戦争 少国民詩集』（朝日新聞社、1943年）にも戦争翼賛の詩が収められている。当時の大多数の芸術家がそうであったように、白秋もまた時代の激流にのみ込まれた一人であった。

1945年、日本の敗戦後、「東亜」は使用がはばかられる言葉となった。替わって「とうあ」に音感の通じる「とわ」が校歌の歌詞に採択され、それに「永遠」という漢字が当てられた。節全体を「永遠に 栄ゆく」と書き表し、音数をそろえて「とわに さかえゆく」と歌うことになったと推察される。

原詩から表現が変わった箇所は他にもある。1番から3番まで、当初、歌詞はいずれも、「東京、東京、高等工学」と結ばれていたが、後に、歌いやすさを考慮したからであろう、「東京、東京、東京高工」と改められた。そして、東京高等工学校が、芝浦高等工学校、芝浦工業専門学校と変遷し、1949年、新制大学に移行して芝浦工業大学になったところで、何番の歌詞も最後が「芝浦、芝浦、われらが母校」に変わったと思われる。

「歌は世につれ 世は歌につれ」という言葉がある。時代、社会の風潮を背に歌が生まれ、その歌が時代の空気を染色するという関係を表している。芝浦工大の校歌には折々の学校の姿が映し出されている。

翻ひるがえって、「世は歌につれ」についてはどうか。この格調高い校歌が、時代、社会に訴えかけるものが過去にあったか、現在あるのか、そして未来にあるだろうか。（文中敬称略）



加筆された校歌の歌詞原稿

史料に見る芝浦工業大学 31
(2007年2月号から始まった連載企画)

大空かける夢、振るう熱弁 青春の華を見た部活動



吉原さんの東京高等学校附属工科学学校在学時の身分証明書

1938年4月、芝浦工大の前身である東京高等工学校附属工科学学校精密機械工学科に入学した吉原正皓さん。1944年12月に芝浦高等工学校機械工学科を繰り上げ卒業するまで6年余りの学生生活の記念に、入学試験受験票、身分証明書、学生(生徒)証を大切に保管している。

身分証明書は縦12cm、横7.5cm、同じ大きさの学費領収証がその右に対になって付いており、二つ折りにすると携帯にも便利なサイズである。年度ごとに発行されたものだが、後者には月々の欄に学費の領収印が押されている。年2回に分けて支払う現在とは異なる学費納入の仕方だったことが分かる。

学生たちの部活動も、今は趣が異なる。吉原さんは、校庭に展示された実物のグライダーに心ひかれ、グライダー部の活動に参加するようになった。新入りのころ、千葉は松戸、江戸川の河川敷で受けた初級訓練が吉原さんには懐かしい思い出である。プライマリー(初級機)に乗って、左右にぶれないように補助翼を使って水平を保ち、地上を滑走した時の感動は今もあせない。

埼玉の秋ヶ瀬、荒川の河川敷で行われた合宿も忘れられないと吉原さんは言う。それは、食糧難の当時に3升ほどの米を工面し、飯ごう炊飯用にと息子に持たせてくれた母親の思い出とも重なる合宿である。夏の終わり、秋口にかけてのころ、大雨に見舞われて荒川が氾濫。格納庫も水浸しになった。合宿ではグライダーを洗い、乾かして使った。10人ほどが二手に分かれてゴム索(ゴム製の綱)を引き、上級生が乗った機体を河川敷の上空15～20mに浮かせ、300m近く飛ばした。見上げる青空に白鮮やかな機体だった。

戦局の悪化につれてグライダー部の活動も先細りになった。結局、吉原さんは部の活動で空を飛ぶ機会のないまま、繰り

上げ卒業を迎えた。

後日談がある。戦後しばらく経ってから、吉原さんは日本グライダークラブに入会。念願の自ら操縦して空を飛ぶ夢を叶えた。74歳まで風に乗り、飛び続けたそうである。

吉原さんとは東京高等工学校附属工科学学校から同期の中村(旧姓 山本)信夫さん。附属工科学学校に入学して弁論部に入った。部員は20人近くいたという。年2回ほど開かれた発表会には各自が原稿を作成して臨んだ。中村さんは演題「若人よ 希望を持って」を400字詰め原稿用紙4枚の草稿にまとめ、それを基に発表当日、旧芝浦校舎本館4階の大講堂に集まった500人近くの聴衆(学生たち)を前に、「希望のない人間は船に舵のないようなものである」と熱弁を振るった。

発表会に付き物だったのが聴衆から飛んでくる猛烈な野次。演説の最中、激しい野次を浴びせられ、壇上で立ち往生する弁士が続出したという。中村さんにとって、話すことは楽しかったが、この野次は難物だった。「それがどうした!」と飛んでくる、迫力ある声にひるむことなく、堂々と論を張る訓練にもなった発表会である。聴衆もまた、弁士のそのような成長を楽しみに大声で野次を飛ばしていた節がある。正課の外にも学生たちに学ぶ場と機会があることは、今も昔も変わらない。



旧芝浦校舎大講堂で開催された弁論大会(1939年)



校庭に展示されたグライダー (1938年)

手書きの科目配当表



1974年度
「学科目履修課程表」(表紙)

学生が各学期の開始に当たり、履修計画を立て、履修登録する際に参考にするのが科目配当表である。開講学科目について、配当されている年次・学期のほか、単位数、必修・選択の区別、担当教員名などが学科別に記載されている。

芝浦工大では科目配当表が収められた冊子が年度ごとに作られ、学生の履修選択用に配られている。以前の「講義要目」「大学生活の手引」「大学便覧」などがそれぞれに当たり、年度によっては数種発行されたこともあったが、システム工学部が開設された1991年度以降は「学修の手引(シラバス)」に一本化して収載されるようになった。

学生の履修に関する情報源として必須だけでなく、授業の時間割作成に先立つものとして存在していなければならないのが科目配当表である。新学期に配布するため、遅くとも3月中に冊子の形にしておく必要がある。

ほとんどの年度の科目配当表は文字や数字・記号が活字に印刷されたものだが、1974年度のそれには手書きの個所が多く見られる。この事情を、当時の実務担当者であった芝浦工大の元職員、理事を務めたこともある山田清人さん(1964年電気工学科卒業)に聞いた。

芝浦工大の年表「50年のあゆみ」を見ると、前年(1973年)の12月8日、理事会が学費改訂を発表。12月15日、これに反対する学生が臨時学生大会を開き、学費値上げ

反対を決議した。年明けて値上げ反対闘争は更に激化。1月16日、この動きの影響を受けて大学の期末試験実施は4月以降に延期と決まった。混乱の異常事態下、新学期の開始が迫っていた。

1960年代の終わりから1970年代初めにかけて、いわゆる大学紛争時、学生への対応をめぐって学内が分裂、教授会が二つ存在した。1972年、その教授会双方が和解したとはいえ、教職員の中にしこりが残っていた時期でもある。そこに起こった学費値上げ反対闘争である。

科目配当が決まらないことには大学の授業は行えず、大変なことになる。だが、学科から原稿が集まらないまま時間は過ぎた。追い込まれて周囲がおろおろする中、教務課員として表の作成を一手に引き受けた山田さん。窮余の策に考えついたのが、手書きで科目配当表を作ることだった。

学内混乱で動揺していた各学科から科目配当に関する情報を聞き出し、毎日少しずつ、断片的ではあれ判明した事柄を丹念に表に書き込んでいった。一度決まった担当教員が変わる場合もあったが、手書きだと小回りがきき、簡単に修正できた。山田さんは、ロtringの製図用ペンを使って表を埋めていった。地道な作業だったが、時間との競争を強いられた。

出来上がった表の中、科目の必修・選択の記号に苦勞の跡が忍ばれる。一重丸は既製のハンコを使ったが、二重丸のそれではなく、一重丸の中に小さな丸を手書きしたそうである。

悪戦苦闘の末にようやく完成した原稿をドラム型スキャナで転写し、原紙を作成するトーシャファックス(謄写原紙自動製版機)にかけた。学内の輪転機を使って印刷したのは約1,500部。手書きの1974年度科目配当表が登場した舞台裏の話である。

1974年度「学科目履修課程表」に収められた科目配当表(一部)



創部40周年
記念式典DVD

口伝えの芝浦節 —スキューバダイビング部の不易流行

マリンブルーの海に潜る。そこは地上の喧噪を離れた別世界。ダイバーのすぐ目の前を彩り鮮やかな魚が泳ぎ回る。スキューバダイビングの醍醐味であろう。

それが個人の秘やかな喜びに止まらないのがスキューバダイビングの奥の深いところである。潜る人同士の交流、密なつながりに根ざした喜びも実感できる。その魅力を部活動の中に見出す人たちが集うのが芝浦工大体育会スキューバダイビング部(SDC)。1967年6月にアクアラング同好会として発足、1974年度に部に昇格した。2010年5月現在の登録部員は24人、OB・OGは250人以上になる。

SDCの13期生、OB会の事務局長でもある早武忠昭さん(1983年工業経営学科卒業)に部の活動について話を聞いた。カタカナ名称からは意外に響くかもしれないが、硬派の部である。30期ごろまでは加盟している関東学生潜水連盟の会合にも学ランを着て出席したという。

創部以来の無事故、安全潜水の実績を誇りに活動を続けている。勝ち負けを競うような競技性は少ないスポーツだが、一步間違うと命を落とす危険を伴うのがスキューバダイビング。後輩と一緒に潜る先輩にとって、後輩から命を預けられた責任は重い。だからこそ、命がけの場面で後輩に問題があれば、先輩は厳しく叱る。このような体験を共有する仲間に対する同志愛とでも言おうか、濃い思いがSDCに集う人たちの根っこに感じられる。

40年余の星霜、SDCの活動の変遷が、創刊号(1989年発行)から第10号(2009年発行)まで、OB会の文集『潜友』に記録されている。

旧式のボンベをはじめ、SDCの草創期に使われた潜水機材は、現在はより安全なものに変わっている。他にも時を経て変わったことがある。部員は男子に限るというのを伝

統にしていたが、16期(1982年度)から女子の部員を受け入れた。個性尊重を旨としてきたSDCには自然な成り行きであったか。

変わらないものがある。SDCが体育会所属の部となったところに生まれ、今日まで受け継がれてきているのが芝浦節。行事の折々に応援歌や校歌とともに歌われてきた。

東 板東太郎の大利根を従え/西 霊峰富士の峰々を仰ぎ/
ここ関東平野の一角に聳え立つ我が母校/その名も高き芝浦工大/

芝浦節の出だしは、人の輪の中から発するリーダーの大声。取り囲む人たちは歌の節目に合いの手を入れ、リーダーに唱和する。CDなどの音源はない。40年近く続く口承の文化である。2008年に開催された創部40周年記念式典のDVDにはその楽しい大合唱が収録されている。

6月11日、SDCの監督交代式が行われ、そこでも芝浦節が歌われた。翌日、お台場海浜公園で行われた海底清掃の奉仕活動「東京ベイ・クリーンアップ大作戦」に参加した現役部員、高階佑輔さん(電子情報システム学科2年)と田玉紀史さん(機械機能工学科2年)にも話を聞いた。二人はSDCの43期生である。芝浦節を大声で歌う一体感と先輩・後輩の上下関係の心地よさを語り、SDC独自の伝統を、守らないと「もったいない」という言葉で表現した。

松尾芭蕉の俳諧の理念に「不易流行」がある。時が経っても変わらないものが「不易」、時とともに移ろい行くものが「流行」。両者は本質的に対立するものではなく、真に「流行」を得れば自ずから「不易」が生じ、また真に「不易」に徹すればそのまま「流行」を生じる。SDCの営みに「不易流行」を連想した。



OB会の文集『潜友』

- スキューバダイビング部Webサイト
<http://sitsdc.web.fc2.com/>
- スキューバダイビング部OB会Webサイト
<http://www.shibaurasdcob.com/>

芝浦工大発祥の地 大森校舎の所在

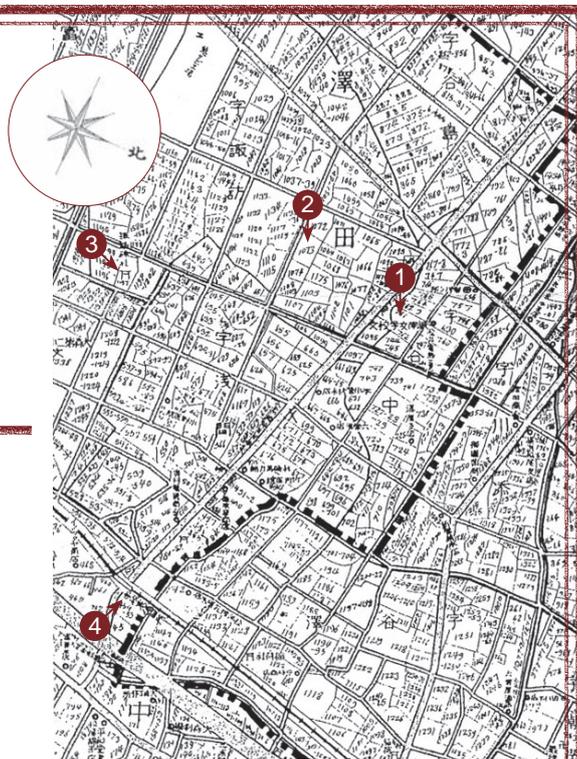
芝浦工大の起源は1927年に創設された東京高等工商学校である。創立者 有元史郎は、1927年2月26日付で設立申請書を当時の東京府知事に提出した。昼間部および夜間部の2部、商業学科、土木工学科、建築工学科の3学科からなる学校として、東京府荏原郡大森町字諏訪1073番地に設置の認可を求めたものである。

認可に当たり、東京府知事から当時の文部大臣に宛てられた文書の中に、備考として次の記述がある。

省線大森駅ヨリ東方約15分時 京浜学校裏停留場ヨリ西方約5分時
土地地地ナルモ生徒保健上考慮ヲ要スベキ程度ニアラズ
附近人家漸ク稠密ノ度ヲ加工 市街ノ体裁ヲナシツアルモ
教育上考慮スベキ施設ナシ
校舍ハ旧城南女学校々舎ヲ其ノ俣使用スルモノニシテ採光通風佳
良ナリ

位置的には省線大森駅は現在のJR京浜東北線大森駅に、京浜学校裏停留場は現在の京浜急行線平和島駅に相当する。城南女学校は現在の戸板女子短期大学(東京都港区芝)の前身校の一つ。1923年1月31日付で設置を申請、同年4月に東京府荏原郡大森町字諏訪1093番地に女子に主として裁縫を教える学校として開校した。東京高等工商学校と城南女学校それぞれの設置の申請書に添付された書類には、いずれも校地が300坪(約990㎡)、建物は木造瓦葺2階建て1棟と書かれている。校舎の平面図を見ると教室などの間取りや大きさも同じである。東京高等工商学校の授業は、1925年に城南女学校が移転した後、その校舎跡を使って行われていたということが裏付けられる。

不可解なのは、学校の所在地が、東京高等工商学校の設立申請書では「諏訪1073番地」、城南女学校の設置申請書では「諏訪1093番地」となっており、一致しないことである。当時の地図を見ると、前者は后者の南方、直線距離にすると約150m離れた所に位置する。また、城南女学校の1925年の学則には所在地が「諏訪1073



大森校舎近辺地図(1925年 文化地図普及会発行)

- ①城南女学校(大森町字諏訪1093番地)
- ②大森町字諏訪1073番地
- ③諏訪神社
- ④学校裏停留所

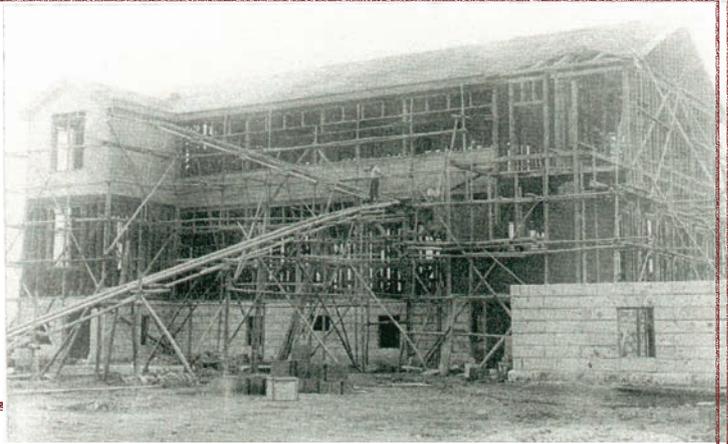
番地」と書かれてあり、謎に輪をかける。

さらに補足しておくことがある。1927年10月、有元は通学や通勤に不便であることを理由に、校舎の移転願を東京府知事に提出。「大森町1073番地」から芝区芝浦町3丁目1番地のアメリカ学校跡への移転の許可を求めた。移転の後も大森では授業が行われ、大森校舎を第1校舎、芝浦に開設したのを第2校舎と称して区別した。1929年には校名が東京高等工学校と変わった。

1930年4月、有元は第1校舎に東京高等工学校附属普通部を開校した。尋常小学校卒業者が入学対象となり、3カ年の修学後に東京高等工学校に進学する学校である。1930年2月17日付提出の設立申請書に添付された校舎平面図は、既述の大森校舎のそれと重なる。学校の所在地は「諏訪1093番地」と記されている。

地番の差異が疑問として残るが、1925年や1929年に発行された地図でも大森校舎の所在を知ることができる。現在の住居表示で言うと、校舎があったのは東京都大田区大森北6丁目23番15号辺りと推定される。前述の校舎平面図にある校門は公道、現在の環七通り(東京都道318号環状七号線)に面していた。往時、その校門を、昼夜多くの学生が出入りした。彼らの強い向学の念に対して、開かれた門の大きさはどれほどであったか。

伝統の地に建つ 芝浦校舎



建設中のアメリカン・スクール・イン・ジャパン(『A HISTORY OF OUR FIRST CENTURY』より)

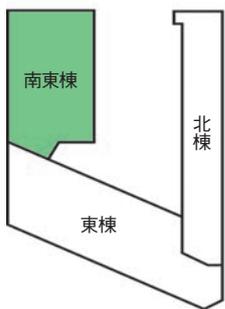
1927年に創設された東京高等工商学校の第2校舎として開設されたのが、芝浦工業大学の伝統を今日までつなげている芝浦校舎である。

本学発祥の地である大森校舎(本誌2010年8・9月号参照)では通学や通勤に不便という理由から、創立者有元史郎が2番目の校舎として探し出してきたのが、東京府芝区芝浦町(現 東京都港区芝浦)にあったアメリカン・スクール・イン・ジャパン跡地の校舎。位置は、2006年に解体される前の芝浦校舎の南東棟回り(下図参照)であった。

アメリカン・スクール・イン・ジャパンの校史『A HISTORY



OF OUR FIRST CENTURY』によると、この校舎について「当時帝国ホテルの建設にあたっていたフランク・ロイド・ライトに理事会が校舎のスケッチを依頼した」と記されている。ライトは、近代建築の巨匠とされるアメリカの建築家で、日本では、1923年の関東大震災にも耐えた帝国ホテルの設計者として名高い。



実現した校舎はライトが当初描いた案からは遠くなったが、「生徒からは

『素晴らしい建物だ』との声があがった。校舎の階上から東京湾の船の往来が見渡せた」と同誌に書き残されている。また、「芝浦に通うのは容易ではなかった。生徒たちは田町駅で下車、線路下のトンネルを運河まで抜けると、フェリーが学校まで運んでくれるという寸法であった。しかし、時には大潮と泥がトンネルに流れ込み、板が敷かれてはいたが、滑りやすいことこの上なかった。ある生徒は真っ白なワイシャツをトンネルを通る間に泥だらけにしてしまったこともある」との記載があることから、校舎が建設されたばかりの1921年は、通学路が未整備であったことがうかがえる。

その後、アメリカン・スクール・イン・ジャパンは麻布に移転。空き校舎となっていたところを有元が探し出し、第2校舎にしたと考えられる。

1927年10月に東京府知事に提出した移転願に添付されていた図面には、「敷地坪数九百八十七坪しやく 校舎坪数五百五十六坪」とある。地下に製図室を置き、1階には教室3部屋のほか事務室、学監室、職員室、2階には教室1部屋、特別教室1部屋、研究室と校長室、応接室とされている。学校としての基本的な機能を持たせていることから、当初は第2校舎としてではなく、完全に移転を考えていたようだ。

2005年度の芝浦校舎の校舎面積は約26,328㎡(約7,964坪)。1927年開設当初の芝浦校舎の校舎面積は556坪、芝浦校舎がもっとも広がったときの14分の1ほどでしかない。この小さな建物から芝浦工業大学の伝統が芽生える。

2006年解体前の芝浦校舎配置図
(別館1号および2号を除く)

【大沢昌助と父 三之助展】

2010年10月31日(日) ~ 12月23日(木・祝)

練馬区立美術館 (東京都練馬区貫井1-36-16 TEL : 03(3577)1821)

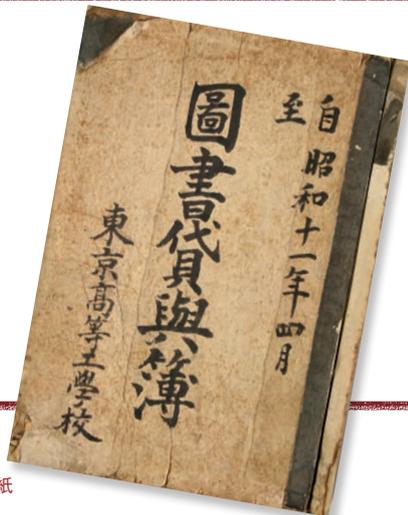
詳細は練馬区立美術館 Web サイト

<http://www.city.nerima.tokyo.jp/manabu/bunka/museum/>

大沢三之助氏は芝浦工大の草創期、前身校の東京高等学校で建築学科科長を務めたことがあります。日本の建築界の基盤作りに尽力し、今日の東京芸術大学建築科を立ち上げた人物です。そのご子息、画家の大沢昌助氏も東京高等学校で自在画を教えたことがあります。

史料に見る芝浦工業大学 36
(2007年2月号から始まった連載企画)

本を通して伝わること、 伝えること



圖書貸与簿表紙



圖書貸与簿記載内容

芝浦工大の前身、東京高等工学校の1936(昭和11)年に作成された図書貸し出し簿が見つかった。一部が破れ、茶色く変色した表紙中央に「圖書貸与簿」(以下「図書貸与簿」と表記)と大きく墨で書かれている。書名、著者名、発行所、発行年、貸し出し先の人(対象は先生)の名前と印、返却年月日などがぎっしり書き込まれている。

貸与簿の著者名の欄に、「東京高等工学校」や「本校」という文字が散見される。『高等微積分学』『高等三角法』『English Essays』といった書名の本だが、いずれも東京高等工学校自作の教科書である。創立者 有元史郎は、先生たちの協力を得て、自校の生徒を含む多くの若者たちを対象に工学系基礎学科の教科書を編集、発行し、工業教育の普及に努めた。

上記の教科書の他にも、機械設計や材料力学など、工学諸分野の基本的な本が貸与簿に記載されている。これら工学の基礎や基本の本が、著者名が変わることなく版を重ねていたり、書名は同じでも工学の進歩に歩調を合わせて著者が替わり、内容の改訂を繰り返したりしながらも、本学の図書館に守られるように収蔵されてきた歴史に思いは至る。また、書名欄に記されている本の大方は工学系だが、『商法大意』『法華経大講座』『国体の本義』『栄養読本』といった異色の本も混じる。そうした本も取りそろえていた当時の本学図書館の在りようも興味深い。

この図書貸与簿について図書館事務課の平島美代子

課長に聞いた。平島さんには、芝浦工大に入職して間もないころ、愛読する夏目漱石の全集が大宮キャンパスの図書館にあることを知って幸せな気分になった思い出がある。それは今も大宮の図書館の書架に並んでおり、平島さんが図書館で働く心のよりどころにもなっている。心に残る本との出会いは取りも直さずその著者に出会うことであろう。本は時空を隔てても人(読者)と人(著者)をつなぐ。図書館はこのつながりを提供する場である。

本学の図書館が2000年度から年に通常2回実施している企画に「選書ツアー」がある。図書館の利用者、主として学生が大きな書店に出向き、図書館に置いてほしい本、研究や学習に必要な本を選ぶというもの。利用者の要望を蔵書構成に直接的に速やかに反映することが目的で、利用者サービス向上の一環として本学図書館が取り組んでいるイベントである。今年前期(6・7月)の開催には延べ30人が参加、357冊の本を購入した。積み重ねて10年、選書ツアーは今や行事として定着した観がある。

選書ツアーに参加した学生の中には卒業後に本学に入職、教職員として母校で働くことになった人たちもいると平島さんから聞いた。図書館を利用し、その在りようにいささかでも関与した学生が教職員となって、後輩の学生たちに図書館の活用を勧めるということもあろう。図書館にアナログからデジタル化の現象面の環境変化はあっても、本が仲介して連綿と続く人と人のつながり、伝承の本質は変わらないのではなかろうか。本学図書館の営みにも歴史の巢を見出した思いがする。

※図書館では貸出記録を公開することはありません。本稿の掲載にあたっては、先生の個人名と印を伏せてあります。



選書ツアー (2000年11月、丸善日本橋店にて)

2010年度



東京高等工商学校 初代建築学科長 大澤三之助

—伝統の空間を近代に再興—

大澤三之助は、1867(慶応3)年、江戸に生まれた。1894(明治27)年、東京帝国大学工科大学造家学科(現 東京大学工学部建築学科)卒業。1897年、東京美術学校(現 東京芸術大学。以下、美校)講師、1902年、教授となる。この間、母校の講師も務める。美校では建築史、装飾史、家具史などの分野を担当した。当初は建築科がなく図技科のみだったので、大澤が中心となり、岡倉天心の構想にあった建築科の実現に向けて基礎を固め、1923(大正12)年、独立を達成。この間、宮内省技師などの官職や兵役を務める。1915年、工学博士。

建築に取り組む大澤の姿勢について、清水重敦(奈良文化財研究所)は「木割を中心とする在来建築の継承という態度が、三之助の日本建築に対する関心を特徴付けている」
「様式ではなく、日本建築に内在する論理を引出そうとした。(中略)つまり、日本建築の空間を、近代に再興しようとしたのである」と述べている。

大澤は建築教育をライフワークとしたので、実際に設計した作品は少なく、現存するものはほとんどない。官職にあったとき設計監理に当たった有栖川宮本邸は、後に「御座所」を京都円福寺伏虎殿として移築したため、現存する。大澤の作風をよく伝える希少な遺例である。美校では1914年、煉瓦造校舎(写真)を手掛けている。

1927(昭和2)年、本学創設に当たって建築学科長。その任務の第一は人集めである。当時の各科学課担任表によると、小野薫日本大学教授、大澤一郎早稲田大学助教授、桜井省吾大倉土木技師、藤田金一郎大蔵省技師など錚々たる顔ぶれである。自在画担当として次男昌助の名も見える。大澤自らは建築史を担当。本学講義録として「日本建築史概要」「同・附図」が遺されている。

古い卒業生名簿を見るとデータは少ないが、職業は建設業より設計事務所の方が多く、その中では地方での自営が多い傾向。設計が多いのは大澤の影響だろうか。

1938年、有元史郎校長逝去に際し、その早逝を惜みつつ、残されたものが一致団結努力して学園を成功に導くことが無二の追善となる、と追悼文を寄せている。開校当初から二人の間には、30才近くの年令差を超えて信頼関係が築かれていたことが想われる。

1945(昭和20)年、太平洋戦争末期、大澤は鎌倉・腰越に疎開、自らが設計した福澤家別邸に身を寄せていた(論吉長男一太郎夫人は三之助の妹)が、終戦1カ月前に79年にわたる生涯を閉じた。(文中敬称略)

謝辞：今回お世話になった大澤悟郎氏、谷口興文氏、上山陽子氏には深謝申し上げます。

【参照文献】

練馬区立美術館：「大沢昌助と父 三之助展」(2010年刊)
松尾小三郎編：「有元史郎伝記」(1940年刊。復刻版1997年刊)



大澤三之助基本設計の東京美術学校校舎(1914年竣工。現存せず)

【大沢昌助と父 三之助展】

2010年10月31日(日)～12月23日(木・祝)
練馬区立美術館(東京都練馬区貴井1-36-16 TEL:03(3577)1821)

詳細は左記の美術館Webサイト
<http://www.city.nerima.tokyo.jp/manabu/bunka/museum/>

建学の精神 社会に学び、社会に貢献する技術者の育成

本学の建学の精神の文言が、常勤理事会の審議を経て2010年に確定した(本誌3ページ参照)。その依拠するところも良く理解され、建学の精神が本学に集う人たちにあって精神的な支柱として確立することが望ましい。

建学の精神は、創立者 有元史郎の言葉の中から紡ぐのが自然に思われる。有元の論文の中で最も注目されるのが、本学の前身、東京高等工学校発行の『校友会雑誌』第5号に掲載された、1931(昭和6)年12月発表の論文「非科学的教育の提唱」である。

その中で、有元は「非科学的教育とは科学を排斥するものでも教育の科学研究を否認するものでもなく、学問的体系によらざる教育、科学的観点の下に教材 蒐 集することなき教育を意味するもの」とし、「我等の生活の中に科学の解け込んだ現代文化の諸相を教材とし、社会の一員たる個人に社会的活動の意義を体得せしめる教育」を提唱した。そして、東京高等工学校は「本邦の私立学校として特色ある専門教育を施し以って実社会に貢献せんとする」と宣言した。これを源泉として脈々と流れる実学重視の技術者教育こそ本学の真髄であろう。

本学の根本である実学重視を、建学の精神の骨子として、深意を有しながらも平易で簡潔に表現するのは難題であった。そこを打開したのが、本学の創立90周年に向けた取り組み「チャレンジSIT-90」作戦の紹介の際に、建学の理念を表すものとして用いられるようになった「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」である。「非科学的教育の提唱」のくだりを、含蓄を損なうことなく、現代

風に解釈、表現している。建学の精神の文言として採択された所以である。

押さえるべきは、後に1949(昭和24)年、新制大学として設置された芝浦工業大学の設置要項や学則に示された技術者育成の姿勢である。

芝浦工業大学設置要項 一、目的及び使命

識見豊かな技術者を養成するを以て目的とし、学び乍ら学理を応用研鑽する事により優秀な指導者を育成し、文化日本建設の為に貢献するを以て其の使命とする。

芝浦工業大学学則 第一条

本学は教育基本法並びに学校教育法に則り学術の中心として深く工学の研究を行い世界文化に貢献し、併せて広く一般の学術教養と専門の工業教育を施す事に依り、学生をして人格を陶冶し学理を究めしめ、体位の向上を計り、以て優秀なる技術者を育成する事を目的とする。而してその実践と応用に依り将来工業界の指導者たらしむる事を使命とする。

この「目的」規定について、本学の歴史資料整理ワーキンググループ委員を務めたこともある丸山剛史宇都宮大学教育学部准教授は、本学創立80周年記念誌『温故知新』に「芝浦工業大学」建学の理念」と題した論文を寄せ、「芝浦工業大学がその前身校の創立以来、技術者の育成を目的としてきたことの意義は小さくはないと考えられる。なぜならば、例えば、同時期に発足した工学系単科の大学でも、技術者の育成を大学の『目的』として設置要項および学則に明記した大学は存在していないからである」と述べている。学校開設に当たって旗幟鮮明に掲げ、その後も堅持している「技術者の育成」は本学の真骨頂であり、建学の精神の結句として肝要である。

そして、社会から何を学び、社会に何を貢献するのか、学生たちには対象である「社会」にも目を凝らすことが期待されていたように思われる。有元は、工業立国の担い手であるにもかかわらず、不遇であった当時の技術者の地位向上にも力を注いだ。建学の精神には、技術者育成の先に理想とする社会を展望した創立者の思いもろくがえる。



有元史郎の論文「非科学的教育の提唱」

青春の熱情を 結実したギター演奏会



増田さんの「SHIBA-1グランプリ」出品

卒業生には母校への1日里帰りとなる毎年恒例の行事、ホームカミング・デーの第16回の集まりが2010年11月20日に持たれた。豊洲キャンパスの会場は、該当する年次の卒業生をはじめ、約300人が出席してにぎわった。当日のプログラムで好評を博したのが初めての企画「芝浦お宝鑑定 SHIBA-1グランプリ」。卒業生が学生時代の思い出の品を持ち寄り、その品にまつわるエピソードを語って、品自体の価値、品への思い入れや母校愛の深さをアピールした。

この初企画に7人の卒業生が出場し、それぞれが出展した品について会場のステージでプレゼンテーションを行った。その内容が「SHIBA-1グランプリ」の審査員とホームカミング・デー出席者の投票により評価され、結果、最多得票で見事に第1回のグランプリに輝いたのが増田(旧姓 正者)哲雄さん(1970年建築工学科卒業)である。

1966年、増田さんが芝浦工大に入学した年、大宮キャンパスが開校。増田さんは自らを「大宮1期生」と語る。当時、通学路は未整備、雨の日はぬかるみがひどく、東大宮駅からキャンパスまで歩くのに、長靴が学生たちの必需品だったそうである。

また、増田さんが在学していたころ、全国の大学はいわゆる大学紛争の混乱の渦中にあった。芝浦工大でも、1968年、バリケード・ストライキに突入した。増田さんは激化する一方の学生運動になじめず、距離を置いて学生生活を送った。

そうした増田さんの心をとりにしたのが、入学してすぐに加入し、活動にのめり込んだ学友会ギターアンサンブルの活動。高校時代、吹奏楽部でドラムを叩いていたが、

近所に住んでいたギター演奏の名手の影響もあり、大学に入ってギターを始めた。

増田さんが在部していたころ、上級生には部の創設にかかわった先輩たちがいた。彼らは授業を受けていた芝浦のキャンパスから東大宮まで足しげく通い、入学時は過半数がギターを弾けなかった後輩たちを熱心に、そして厳しく指導した。その指導に音を上げて退部する者も続いたが、一方で活動を続ける者たちの結束は固くなり、ギターアンサンブルは部員が70人ほどの大所帯になった。

増田さんが「SHIBA-1グランプリ」に出展したのは、そのギターアンサンブルの定期演奏会の収録レコード、演奏会のプログラム、200円の入場券、演奏会風景の写真である。

LPレコード2枚の一つは第5回定期演奏会、1968年11月28日、虎ノ門ホールで開かれたものの収録盤である。演奏曲目は、A面が「ボレロ」、「スペイン舞曲・スペイン組曲」、B面が日本古謡の「元禄花見踊り」「かつぼれ」など、山田耕筰の「この道」もある。

もう一つは第6回、1969年11月20日、共立講堂で開かれた定期演奏会の演奏曲目、A面にモーツァルトの「交響曲第40番」、B面に日本民謡の「ちゃっさり節」「ひえつき節」などを収めている。多彩な選曲である。赤城淳編曲の、心に染みる、懐かしい曲の数々が単一のギター合奏から生まれている。

増田さんは3年次、部の会計も担当した。演奏会を開いたのは著名な会場ばかり、借用料が高額になったが、部員たちは困難をものともしなかった。1枚200円の入場券を手分けして売りさばき、資金を調達した。初任給が23,000円の時代の200円である。努力のかいあって、各会場は1,500人もの客で埋まり、赤字にはならなかったという。

定期演奏会は、若さが実現させたギターアンサンブルの年間最大のイベントであった。苦勞と苦勞と思わないひたむきさが原動力であった。その若さとひたむきさを感じ取り、増田さんたちの取り組みに、学生時代の自らを投影して票を投じたホームカミング・デー出席者も少なくなかったのではなからうか。



第6回ギターアンサンブル定期演奏会(1969年)

史料に見る芝浦工業大学④
(2007年2月号から始まった連載企画)

昭和28年度 入学志願要項

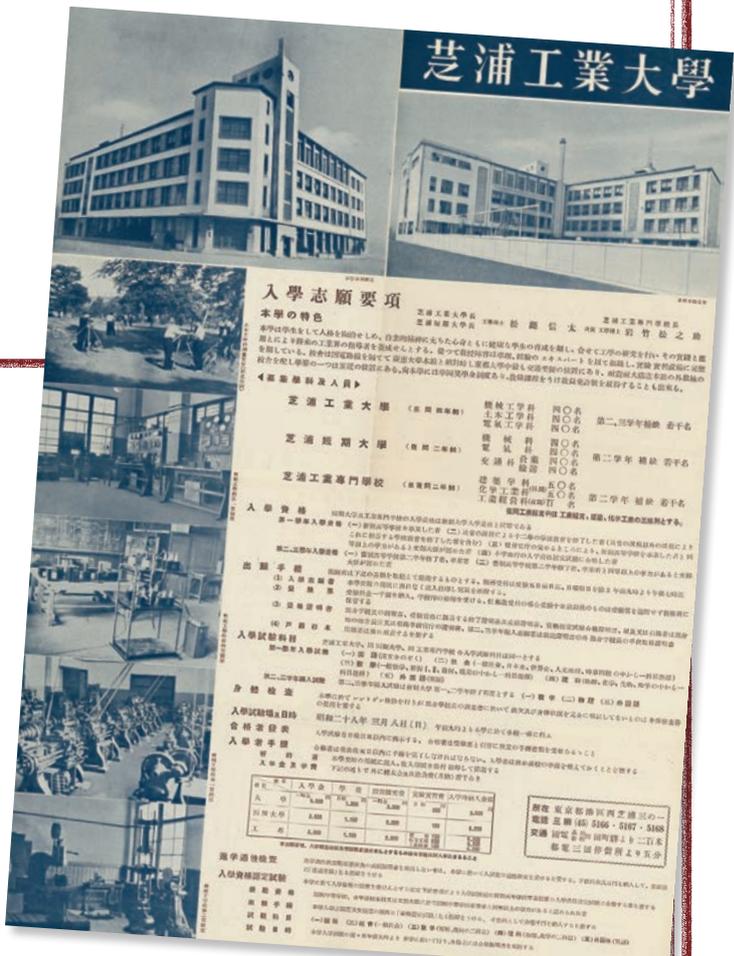
1953(昭和28)年度の本学入試の「入学志願要項」が見つかった。大きさはA2判、ポスター様である。当時、本学園に設置されていた3校、芝浦工業大学(大学)、芝浦短期大学(短大)、芝浦工業専門学校(工専)の学生募集の要項が1枚に収められている。大学と短大は学長を松縄信太が兼任し、工専は岩竹松之助が校長を務めていたことも要項に記されている。

この時期、日本の大学は歴史的な節目にあった。1949(昭和24)年4月、学制改革によって、芝浦工業大学をはじめ、新制大学166校が誕生した(一部公私立の新制大学12校の発足は1年前)。4年後の1953年3月、大多数の新制大学の第1回卒業生が世に巣立った。その時の大学卒業者は、国公私立、新制旧制合わせて約13万人。ちなみに、現在、2011(平成23)年3月の大卒者は約55万人にのぼる。

そうした状況下、本学の1953年度入試は行われた。大学(昼間4年制)の募集人員は機械工学科・土木工学科・電気工学科がいずれも40名、短大(夜間2年制)は機械科・電気科・交通科(営業)・交通科(輸送)それぞれが40名、工専(昼夜間2年制)は建築学科・化学工業科(昼間)が50名ずつ、工業経営科(夜間)が100名であった。

1953年度の要項で目を引くのは、3校とも国語、社会、数学、理科、外国語(英語)の5教科入試を実施していたことである。当時、すでに多くの私立大学が、文系理系を問わず、3~4教科の入試を実施していた。競合する工学単科の大学の中でも、本学の5教科入試実施は異色であった。

大学受験雑誌『螢雪時代』(旺文社)1953年7月号を見ると、その年の本学入試で学力検査(総点200点)の配点は、国語20点、社会20点、数学60点、理科60点、外国語40点と公表されている。本学の入試が5教科入試から3教科のそれに切り替わったのは5年後、1958(昭和33)年度入試からである。今日よく用いられる言葉に「アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)」というのがある。



1953(昭和28)年度入学志願要項

それとも絡むと思われるが、本学が入学志願者に求めた学力観がどのように移り変わっていったか興味深い。

ほかにも要項に記載されている事柄で目を引くことがある。試験日である。1953年の入試は3月8日に実施された。年度により日が多少ずれることはあったが、本学は例年3月上旬に実施していた。国立も私立も大学入試は3月に行われていた時代である。ところが、いわゆる団塊の世代が大学に進学するようになった1967(昭和42)年ごろから、多くの私立大学が国立大学に先立って2月に入試を実施するようになった。芝浦工大は、1966年は3月6、7日に実施、1967年は2月21、22日に試験日程を早めた。

1950年代、日本の大学が経営的に不安定で苦難に喘いでいた時代の本学入試を振り返ってみた。志願者数の記録を見ると、1953年の入試の時は690人。本学が新制大学に移行したのは1949年、その最初の入試の志願者はわずか32人であった。直近の2011年度入試の全日程合わせた志願者は34,321人、前年の本学の最多記録を塗り替えた。約60年前との比較だから当然かもしれないが、隔世の感がある。(文中敬称略)

2010年度

初めて入学した女子学生

1949(昭和24)年、新制大学として工学部2学科、機械工学科と土木工学科の設置でスタートした芝浦工業大学に1954(昭和29)年4月、建築学科が増設された。その1期生として入学した若月(旧姓若井)弘子さんに話を聞いた。

本学が新制大学になって初めて入学した女子学生だが、大上段に構えた入学動機はなかったと若月さんはいう。女性が社会に出て働くのに職種が限られていた時代、納得のいく職業に就くために大学進学を考えた。文系か理系かも決めかね迷っているうちに高校卒業が間近になり、時期的に受験可能な大学はごく少数しか残っていなかった。その一つが芝浦工大だった。長年、1級建築士として働いてきた若月さんだが、建築の専門家の道を選んだのも、大学で建築を学んだ従兄弟がいた縁だという。

若月さんは興味深いエピソードも披露してくれた。入学後初めての授業に出ようとして若月さんは教室のドアをそとと開け、中をのぞいて息をのんだ。大教室は黒の学生服の男子学生でびっしり埋まっていた。その光景になぜか怖くなり、家に飛んで帰ったと、若月さんは苦笑しながら思い出を語った。

帰るなり若月さんは母親に「大学に行きたくない、やめたい」と訴えた。ところが、明治生まれの父親はこれに激怒。芝浦工大の受験も入学の希望も、恐る恐る申し出た娘に対して何も言わずに承諾した父親だったが、「大学をやめたい」という願いは頑として聞き入れず、娘を厳しく叱った。

その翌日、仕方なく登校した若月さんは教室に入り、中を見まわして驚いた。大勢の男子学生に混じって1人の女子学生がいた。建築学科同期の石黒(旧姓佐粒)浩子さんである。「地獄に仏、助かった」とはその時の若月さんの率直な思いである。

石黒さんは積極的な女性。若月さんには頼もしい存在だった。2009年に鬼籍に入ったが、在学当時はなかった女子トイレの設置を大学に強く要求していた石黒さんの姿は今も鮮やかに思い起こされると若月さんは語った。



上：石黒さん
下：若月さん

石黒浩子さんの夫、石黒哲郎本学名誉教授から1958(昭和33)年の建築学科卒業記念写真を提供していただいた。旧芝浦校舎の正面玄関前に整列した男子の卒業生や先生たちに交じって、左端の方に前後して2人の女子学生が立っている。前が若月さん、後が石黒さんである。圧倒的多数の男子学生に伍して送った2人の学生生活がしのばれる。

若月さんたちの後輩に当たる大場廣子さんにも話を聞いた。1959(昭和34)年に増設された電子工学科に1期生として入学した。同期で女子学生は大場さんだけ、まさに紅一点であった。

女性も男性と同じように一生働ける職に就きたい、それには技術を身に付けることだと考えて工学部へ進学する道を選んだという。埼玉県北部の自宅から田町まで、通学に片道3時間弱かかったが、家庭的で面倒見の良いところが芝浦工大入学の決め手になった。

次長(現在の副学長に相当)の故・岩竹松之助教授は「工業大学にも女子学生がもっと来てほしい」とよく口にしていた。岩竹教授が折々に本学在籍の女子学生を集め、生活面で心配なことはないかどうか気遣い、コーヒーとケーキでもてなしてくれた茶話会は、大場さんの懐かしい思い出である。

大場さんは1963(昭和38)年に本学を卒業、教職に就いた。工業高校一筋で、当初はこずっていた男子生徒にも気合負けせず、丁々発止のやりとりも楽しめるようになったそうである。女性の先生がいることで女子中学生も工業高校に入学志願しやすくなると言われ、責任の重さを感じながら勤務していたという。

2010(平成22)年度、芝浦工大の学部在籍の女子学生は861人、学部在籍者の12.0%である。若月さんや石黒さん、大場さんが芝浦工大生だった時代とはキャンパスは大きく様変わりしている。



1958年3月 建築学科卒業記念写真

前代未聞! 大宮図書館設計コンペで 教授と学生が一騎討ち ~「芝浦の施設は芝浦人の設計で!」の原点~



大宮・図書館に関する記事が掲載された雑誌「新建築」(第46巻第12号、1971年12月発行)の目次

1967(昭和42)年末に勃発した「芝浦工大闘争」は激烈を極め、その後の「芝浦工大改革」のきっかけとなった。この過程の中で学生たちが掲げた諸問題の中に「図書館の充実」があり、それを受けて大宮キャンパスに図書館を新設することになった。

計画は上記の経緯もあり、教員、図書館員そして学生も交えた図書館建設委員会の手で進められ、建設位置、内容など大議論となった。次いで、建築計画作り、基本計画について「学生も参加できるオープンコンペ」をやることになった。これは前代未聞の画期的な事である。

提出された案を学内に公開し、学生、教職員つまり全芝浦人参加による選定で最終的に絞られたのは、建築工学科沖種郎教授の案と建築学科学生、水島信の案だった。そして結局、実施に向けて採用されたのは「沖教授案」だった。沖教授は自ら設計事務所(設計連合)を主宰するプロだったため実施設計、そして工事監理も担当し、1971(昭和46)年11月、大宮に図書館が完成したのである。まさに芝浦人全員参加の図書館づくりだった。

この「前代未聞の設計コンペ」はその後、私石川が理事長として施設づくりに際してこだわった「芝浦の施設づくりは芝浦人の手で!」という「思い」の原点になるのだが、実はここに至る布石もあった。

1966(昭和41)年建設の大宮校舎の設計について、当時の建築学科の設計分野の教員たちが「我々が協力して設計をしよう!」と理事会に申し入れた。これは却下されたが、この「思い」は残った。また1963(昭和38)年

に長野県湯の丸に高原寮を建てた時、私の発案で、これもまた前代未聞の「在学生による計画コンペ」を実施、学生の当選案を私以下、若手教員が「設計図作り」を担当して完成させた。

同じようなユニークな施設づくりは大宮キャンパスのクラブハウスでも実施。このときは「芝浦の卒業生と在学生のみによるコンペ」を実施(60案ほどの応募あり)、建築学科卒業生、五十川勝が当選、実施設計まで担当した。その他のクラブハウスもすべて卒業生による設計である。

この「思い」の中で芝浦の施設の設計は次々と芝浦人が担当した。柏の高校はみねぎしやすお教授、板橋の高校は三井所清典教授、大宮の食堂は橋本邦雄教授、齋藤記念館は相田武文教授、第二体育館は藤井博巳教授である。システム工学部棟(現5号館)は外部設計会社が行ったが、その中での担当者は「芝浦の卒業生とすること」を条件とした。豊洲校舎も外部会社のコンペだが同様の条件である。

この一貫した「思いへの執着」はやや異様に見えるかもしれないが、私にとっては信念である。私立校にとって「我が校を我がものと思う心」が学校を発展させる源泉だと思うのだ。それが「芝浦の施設づくりは芝浦人の手で!」という「思い」につながる。



「人生の記憶に残る出会いと絆の場」を提案した、OB五十川さんによる大宮・クラブハウスのプロポーザル

メートル法推進に尽力した 初代学長 松縄信太

1949(昭和24)年4月、芝浦工業大学が設置された。初代の学長に就任したのが松縄信太である。1905年に東京帝国大学工学部機械工学科を卒業後、鉄道作業局(後の国鉄、現JR)に就職。1926年には鉄道技術研究所の所長となった。芝浦との関わりは、1933(昭和8)年、芝浦工大の前身である東京高等工学校に機械工学科長として迎えられたところから始まる。

戦時下の1944年から経営陣に加わるようになり、1947(昭和22)年5月、財団法人芝浦学園の理事長に就任した。その後、組織変更により学校法人芝浦工業大学となったが、松縄は1966(昭和41)年3月に理事長を辞任するまで19年、芝浦のトップとして経営手腕を振るった。

理事長と校長や学長を兼任した時期もある。1946(昭和21)年10月に芝浦工業専門学校および芝浦工業学校の校長に就任。新制大学への昇格に伴って初代学長となり、1961(昭和36)年6月まで約12年間務めた。この間に、芝浦工業大学の設置、1966年4月の大宮キャンパス開校も手掛け、芝浦工大の歴史に大きな足跡を残した人である。

松縄信太には、もう一つの顔があった。日本におけるメートル法推進のリーダーである。

1921年4月11日、改正「度量衡法」が公布され、日本の長さの単位は基本的にメートル法を使用することが決まった。しかし、まだまだ尺貫法が根強く、メートル法論者と尺貫法論者が激しく対立して、メートル法の全面的な採用には遠い現実であった。松縄は先頭に立って困難な状況を切り開いていった。1951年5月18日、衆議院第10国会通商産業委員会公聴会に公述人の一人として出席した松縄は「メートル法統一と科学の基礎を確立する単位の制定が日本国民を生かす唯一の道である」と論を張った。

松縄がかつて芝浦の学生や教職員に渡して読むように促した自著『静かなる革命』(1959年、誠信書房発行)は、メートル法統一への国民運動を推進する彼の

激しい情熱にあふれている。松縄は同書の中で「メートル法への統一が、科学の根源であり、国民が平和と幸福への扉を開く鍵であると考え、教育に結びつけている」と述べている。

松縄のメートル法にかける思いの強さを物語るエピソードがある。『芝浦工業大学—60年の軌跡—』(1991年、学校法人芝浦工業大学発行)掲載の卒業生座談会で、1955年卒業のある卒業生は松縄を次のように追想した。

学長の松縄先生も運動部の指導にご熱心でしたよ。運動部の学生たちで学長を囲んで話をするということもありました。ただ、松縄先生はメートル法推進に情熱を燃やしておられたから、あの先生の前で尺貫法を使うことだけはタブーでしたね(笑)。いつだったか、ついっかり「先生、今度野球部にいいピッチャーが入って来ます。六尺で十七、八貫目で……」と言ったらもうおしまい。「なぜメートル法で言わない」と怒ってしまって、口をぎいて下さらなくなるんです(笑)。

1946年、松縄は日本度量衡協会の会長に就任した。同協会はこの年、日本計量協会(現日本計量振興協会)に名称変更したが、松縄は1966年までの20年を通して会長を務めた。

会長職最後の年の3月31日、

メートル法が完成した。改正「計量法」により、尺貫法による定規や升などの製造販売が禁止され、メートル法一本になったのである。同月24日、計量界の拠点となる日本計量会館が竣工した。

同じ月に慶事が重なる。芝浦工大の大宮キャンパスが誕生。3月30日に校舎の落成式が盛大に催された。校地の取得に難儀し、多年を費やして漕ぎ着けた開校である。芝浦工大理事長として松縄が最後に成し遂げた大事業であった。

1966年7月6日、松縄信太は85年の生涯を終えた。力を傾注した芝浦工大発展とメートル法統一、積年の夢の結実を見届けた後の逝去であった。(文中敬称略)



『芝浦工大新聞』号外(1966年7月6日付発行)

「システム工学部」開設



「日経産業新聞」(1994年4月1日付発行)

個人情報保護が叫ばれる今、信じられないような新聞広告がある。1994年4月1日の日経産業新聞に掲載されたシステム工学部の広告である。見出しは「国内唯一のシステム工学部一期生251名 いよいよ来春、巣立ちます」。さらに「電子情報システム学科80名、機械制御システム学科93名、環境システム学科78名」と学科の卒業生数を伝えつつ、その下に、全学生の実名がフルネームで掲載されている。第一期生が翌春卒業し社会に羽ばたくことを大々的にアピールする広告であった。

1991年4月にシステム工学部が開設するまでの道のりは決して平坦ではなかった。1981年から工学部教授会と理事会が新学部創設の検討に着手し、1985年に建築系新学部構想の検討も始まっている。1986年には静岡県裾野市から大学誘致の要請を本学が受けたが、県知事改選により白紙撤回となるという出来事もあった。

従来の解析主導型工学とは異なる統合主導型工学の教育・研究を目指す新学部設置の検討が始まったのは1986年である。翌年、埼玉県行田市から誘致要望書が提出され、同年7月には本学が行田市に対して新学部「システム工学部」の設置を公式に表明した。

しかし、大学設置予定地の土地取得が難航し、1989年3月に行田新学部計画を断念する。同年4月に大宮キャンパスに新学部を設置する案が急浮上し、文部省との折衝の末、1989年7月31日に「システム工学部設置認可申請書」の提出を果たしている。この時、当時の理事は新学部設置を「本学にとっては1949年に工業専門学校から新制大学になって以来、40年ぶりの大仕事」と述べている。

1990年6月に文部省による第2次審査が始まり、同年12月、設置認可が下りる。1991年2月にはシステム

工学部棟(現在の5号館)が竣工。同年4月にシステム工学部が開設した。日本初の「システム工学部」の誕生である。しかも、わが国で大学の学部名称に片仮名が使われたのはシステム工学部が初めてであった。

大学の学部で最初の卒業生が出ることを「完成」という。1994年12月に、翌春のシステム工学部完成を記念する「ニュートンの林檎の木植樹祭」が開催された。植樹する木は、ニュートンが万有引力を発見したとされる

林檎の木の枝を、学部の科目「創る」の授業の中で学生が接木して育てた。記念碑の題字は小口泰平初代学部長によるものであり、この林檎の木と記念碑は今も5号館正面向かって右側にある。

その後、システム工学部は2008年に生命科学科、2009年に数理科学科を新設し、同年から学部の名称を「システム理工学部」と変更した。本年4月には大学院に「システム理工学専攻」を開設し、学部のシステム工学教育を大学院まで拡張した。1991年4月の学部開設当時36名であった専任教員は現在70名。開設時から当学部に在籍している専任教員は筆者を含めて8名となった。一方、1994年度の学部完成時に913名であった学生総数は本年度1,936名。来年度に数理科学科が完成すれば、学生総数は2,000名を超えるだろう。

システム理工学部が開設20周年となる本年3月、東日本大震災が発生した。本年9月17日に学部卒業生、OB教員、現役の学生と教員が集まって「学部20周年交流会」を開催する。この日は、私たちが震災復興のために何かができるかについて思い定める日でもある。



ニュートンの林檎の木植樹祭(1994年12月17日)

創部の想いを後代に



ワンダーフォーゲル部の部誌

芝浦工大体育会のワンダーフォーゲル部が、2012年2月完成予定でDVDの部史を制作中と知り、同部OB1期生の手澤隆成さん(1965年電子工学科卒業)と3期生の勝野次雄さん(1967年電子工学科卒業)に話を聞いた。

同部の起源は、1961(昭和36)年4月、11人が集まって結成した同好会。1963年2月には部への昇格申請書を学友会に提出して認められ、体育会に所属することになった。部員31人からのスタートであった。

実は、昇格申請の折、メンバーには葛藤があった。体育会か文化会か、所属先をめぐって激論が交わされたという。ワンダーフォーゲルの運動の原点は抑圧的な社会からの自然回帰。討論の末に至ったのは「自分たちの活動は文化的要素も含んでいる。体育会に所属しても、その中の異端者になろう」という結論だった。この矛盾する考えを抱えながら、危険な活動にも耐えられる訓練と規律を部に根付かせようとして、手澤さんたち草創期のメンバーは試行錯誤を繰り返した。

折々に発行された部誌のタイトルは『南東60-7』。同誌の創刊号(1965年発行)に、青春の気負いに満ちた一節がある。

南東校舎6階の7番、そこが我々の部室である。明日への夢を胸に秘めたワンダーラーが喜びを悲しみを共に分けあう場所でもある。南東60-7は未来への出発点である

部誌の随所に見られるのが、「ワンダーフォーゲルとは何か」という根源的な問いかけである。この自問自答を繰り返しながら50年に及んだ部の歴史である。

ワンダーフォーゲル部はこれまで節目に大きな記念事業、創部10周年にフィリピン遠征、20年にパプア・ニューギニア遠征、30年に東アフリカ遠征、40年にオーストラリア遠征に挑んできた。いずれの遠征でも高峰登頂などの偉業を達成、加えて現地の社会や産業

に関わる調査にも取り組んで成果を上げた。

ワンダーフォーゲル部の現状は、OBが約250人、現役部員は11人である。2010年3月、大宮キャンパスにあった部室を手離すことになった。これに危機感を募らせたOBから、「50周年は海外遠征をする状況ではない。足元を見つめ直す時期だ」という声が上がリ、記念事業として部史を作ることになった。

OBが自分たちの部の創設に抱いた特別な想いを今につなぐ所は他にもある。体育会の弓道部もその一つである。同部OB1期生の下郡慎治さん(1969年機械工学科卒業)と吉澤稔さん(1969年機械工学科卒業)、2期生の佐々木(旧姓 林)慎吾さん(1970年電気工学科卒業)に同部の歩みについて聞いた。

産声を上げたのは1965(昭和40)年5月。下郡さんが音頭を取って12人で同好会を立ち上げた。1966年12月、同好会から部に昇格。部員に対し、人間形成の一助として弓道を通じた精神修養の入魂にも努めた大塚文夫監督(教師七段)を始め、優れた指導者にも恵まれた。自前の道場がなかったため、当初は浜松町の旧芝離宮恩賜公園弓道場に通って練習に打ち込んだこと、1966年6月、苦心して大宮キャンパスに手作りの仮設道場を開いたこと、草創期のOBには懐かしい思い出である。

弓道部は今、現役部員が45人、OBは約220人を数える。2010年春、大宮キャンパスに本格的な弓道場が完成。45年の同部の歴史に大きな結節点となった。

部の創設に関わった両部のOBたちの想いに通底するのは、年月を経ても色あせない部活動へのこだわりである。弓道部OBの吉澤さんは、そのことを語るのに「愛」という言葉を用いた。物心ともに後進を支援し、見守り続ける先輩の口から出て自然に響くが、同時に、部の活動に傾倒した若き自らに対する愛惜も感受され、残心するものがある。



創設当時の弓道同好会メンバー

【 史料に見る芝浦工業大学 46 】
(2007年2月号から始まった連載企画)

東都大学野球 一部リーグ 初優勝



優勝決定の瞬間、歓声に沸く芝浦工大応援席

1961(昭和36)年11月9日、神宮球場3塁側スタンドに大歓声が沸き、5色のテープや紙吹雪が乱舞した。東都大学野球秋季リーグ戦の最終日、芝浦工業大学が駒澤大学を破って一部リーグ初優勝を遂げた瞬間である。

その年の春季リーグ、芝浦工大は日本大学と覇を争い、雌雄を決する一戦で惜しくも敗れた。捲土重来の秋季リーグ、優勝決定は最終戦にもつれ込んだ。敗れると再び涙を飲むことになる。どうしても負けられない試合であった。

7回表、駒澤に追い付かれて2対2の同点、その裏に芝浦が1点を加えて突き放した形だが、試合は土壇場まで劇的に展開した。優勝翌日の朝日と報知、両紙の記事から、緊迫した攻防がよみがえる。3対2で芝浦がリードして迎えた9回表、駒澤2死1、2塁の場面、平凡なゴロが好守の岩下遊撃手の前に転がった。堅くさばいて優勝決定、と思われたその時、岩下がファンブル。歓声のため息に変わった。2死満塁のピンチ、次の打者のカウントは2-3に。息詰まる空気の中、最後の打球となった強いゴロを、1年生投手、薦田がゴムまりのようにはねて捕球、1塁へ送って試合終了。芝浦は宿願の優勝を果たした。

1950(昭和25)年、新制芝浦工業大学誕生の翌年に芝浦工大野球部の歴史は始まる。野球好きの学生11人が集まって部を立ち上げた。野球部長は、当時の芝浦短期大学の学長、選手に対して自ら補習を行うなど、野球と学業の両立にも腐心した岩竹松之助教授(電気工学科)。1951年春、芝浦工大は東都大学リーグ三部に加盟、1年後に二部に昇格したが、そこで足踏み。何度も優勝しながら一部との入れ替え戦で敗退を繰り返し、丸5年、10シーズンを二部で過ごした。

停滞から脱却し、一部に昇格して優勝を成し遂げるために、岩竹部長は「しっかりした監督を置くことが第一」と考え、1956(昭和31)年末、田部輝男氏(立教大学OB、元プロ野球西鉄選手)を芝浦に迎えた。狙いは的中、1957年春季は二部優勝、入れ替え戦にも勝ち、リーグ加盟以来13シーズンぶり、入れ替え戦6度目に



「芝浦工大初優勝」を伝えた朝日新聞(1961年11月10日)

して一部昇格を果たした。しかし、道は平坦ではなかった。一部の他のチームとは力に差があり、1957年の秋季は二部に転落した。再出発を期して学校側も奮起、田部監督は全国を回って有望な選手を集め、チームの基礎を固めた。そして1958年秋季、一部にカムバック。今度は選手もそろい、以前ほど弱くはなかったが、不思議なことに1959年春季から1961年春季まで5シーズン、4位から上がりも下がりもせず、「芝浦は万年4位」と陰口を叩かれた。

汚名返上の初優勝であった。1961年度秋季リーグ10勝3敗、勝ち点5の完全優勝。リーグ加盟から11日目、22シーズンにして辿り着いた頂点である。東都大学野球史上、専修、日本、中央の3大学以外から優勝チームが出たのは、1958(昭和33)年秋の学習院に次いで2度目。芝浦工大はリーグに異変を起こした。

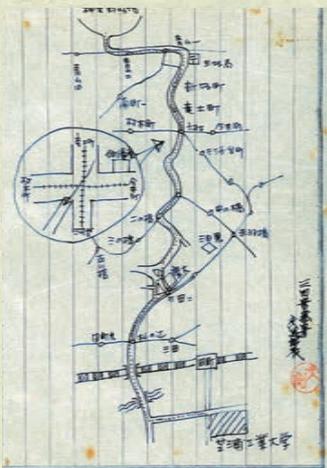
1961年11月10日付の報知新聞に、閉会式の後、神宮球場から芝浦キャンパスまで行われた祝賀パレードの記事が載っている。午後5時半、監督、ナインを乗せたバスを先頭に、約3千人の学生が手に手に提灯を持って球場を出発。青山一丁目〜六本木〜二の橋〜慶大裏〜札の辻と進んで7時過ぎ、地元の人たちも迎える中、芝浦工大玄関前に到着。全員で校歌を合唱して解散した。

その後、芝浦工大は2度(1968年秋季、1970年春季)、一部リーグで優勝した。東都の球史には芝浦工大の選手の名がきら星のごとく並ぶ。神宮で「芝浦」が連呼された初優勝から50年になる。



優勝を祝う提灯行列

母校に送ったエール



祝賀パレードのコース(三田警察署に申請届出)

前号(2011年11月号)の当欄で、1961(昭和36)年11月の「東都大学野球一部リーグ初優勝」について紹介した。同時期、卒業生を対象に発行している広報誌『芝浦便り』第60号(2011年10月1日付発行)に掲載した「教えて!先輩」でもこのト

ピックを採り上げた。

記事を目にした何人もの卒業生から手紙やメール、FAXをもらった。学生時代の印象深い出来事として東都大学野球で活躍した芝浦工大について書いた便りである。初優勝を達成した当の野球部の選手からも便りが届いたが、ほとんどは応援する側にいた人たちである。

上遠野啓之助さん(1962年機械工学科卒業)にとつて初優勝のその日のことは今も記憶に鮮やかである。1959(昭和34)年に軽音楽部を創部した上遠野さんが、1961年、野球部が優勝するかもしれないということになり、クラリネットを持って応援団と共に神宮へ行き、演奏、応援した。

夕暮れの神宮球場で、相手校(駒澤大学)は応援団以外、観客は少なく空席が目立った。それに対して芝浦工大は大入り、応援スタンドの上の方まで満席状態で異様な熱気に包まれていた。緊迫した試合展開、競り合いの末に芝浦工大チームが勝って初優勝が決定。ゲームセットの瞬間、あらかじめ配られていた新聞紙を細かくちぎり、帽子の中に用意しておいた上

遠野さんはそれを思い切りぶちまけ、紙吹雪を飛ばした。そして周りの人、誰彼構わず抱き合って喜んだという。その後、応援した芝浦工大生約3千人は祝賀パレードに参加したが、上遠野さんもその一人。神宮球場から芝浦校舎まで、楽器を演奏したり「しばうら～、しばうら～」と蛮声張り上げて校歌を歌ったりしながら歩いた。沿道の人たちから「芝浦工大、おめでとう」と声をかけられたことが嬉しかったという。

竹内新二さん(1960年土木工学科卒業)は応援団と一緒に野球部にエールを、それもトランペットを吹くという形で送った。入学後しばらくしてジャズの愛好者10人ほどが集まってジャズバンドを立ち上げた竹内さんたちは、1957(昭和32)年春、芝浦工大が東都大学野球の一部リーグに昇格したあたりから、応援団の要請を受け、野球部応援時に楽器演奏をすることになった。授業の途中で退室し、応援団員と一緒にトラックに乗って神宮球場に出掛けることが度重なったと語る。

竹内さんの応援演奏の思い出のほとんどは神宮でのことだが、1度だけ東京港日の出棧橋に出掛けたことがあるという。1957(昭和32)年4月24日、偉業を成し遂げて5カ月ぶりに日本に帰ってきた第1次南極観測隊を出迎えるためであった。観測隊のメンバーの中に一人の本学卒業生がいた。會田一夫さん(1952年 芝浦工業専門学校電気科卒業)である。會田さんについては、次号の当欄で詳しく紹介するが、誇らしい先輩の栄誉を讃えて芝浦工大の大きな校旗が打ち振られ、大歓声の中、校歌が歌われた。竹内さんも一所懸命にトランペットを吹き続けた。

上遠野さん、竹内さん、そして二人がエールを送った先の野球部の選手たちと會田さんは、いずれも「芝浦」を共通根にする人たちである。「芝浦」を具現する対象にエールを送った時間、東の間ではあれ、上遠野さんと竹内さんには「母校愛」が形を成していたのではなかろうか。



第1次南極観測隊帰国迎え風景、芝浦工大の校旗が見える

南極に渡った志 宇宙へ馳せた夢



朝日新聞1957年4月24日夕刊(国立国会図書館所蔵)
歓迎の人たちの中に芝浦工大の校旗が見える

航程4万4千km、168日にわたる観測の旅を終えた宗谷を約8千の人たちが東京港に出迎えた。日の出棧橋では芝浦工大の大きな校旗も打ち振られ、大歓声の中、校歌が演奏された。會田さんはデッキから手を振ってそれに応えた。

會田さんの南極観測参加は1次だけではない。1966(昭和41)年の第8次にも参加し、通信設備を担当。その後、電波研究所で始められた宇宙通信の研究でも実績を積み重ね、それを會田さんたちは東京オリンピックを人工衛星を用いて中継することに生かした。

1956(昭和31)年11月8日、国際地球観測年の世界協同観測事業の一翼を担って、当時の日本の最先端の科学技術を託された南極観測船「宗谷」が東京港から南極へ、壮途に就いた。国民の大きな期待を背負って、盛大な見送りを受ける船上の南極地域観測隊メンバー53人の中に1人の本学卒業生がいた。前号(2011年12月号)の当欄で言及した會田一夫さん(1952年芝浦工業専門学校電気科卒業)、時に29歳であった。

1947(昭和22)年、芝浦高等工学校を卒業した會田さんは当時の文部省電波物理研究所(後年、官制変更により郵政省電波研究所となる)に入所。電離層の観測、そしてその自動化などの研究に従事した。

在職中に第1次南極地域観測隊の隊員に選ばれた。日本から南極地域に至る電離層の船上での観測と基地建設を担当することになったが暗中模索、極地に着くまでも着いてからも苦労の連続だった。救いだったのは試作した観測機が順調に作動してくれたこと。宗谷航海時の暴風雨にも砕氷の激しい振動にも耐えて観測を全うし、10年にわたった會田さんたちの電離層観測機自動化研究の努力は報われた。

悪戦苦闘の末に日本と通信するアンテナも完成。観測隊の総力を挙げて昭和基地の建設は進み、設備が整えられた。11人の越冬隊員を残して宗谷が南極を離れる時、會田さんは張り詰めた緊張が一気に緩み、達成感と安堵感の入り混じった気持ちに襲われたという。

この国家的事業の成功は、敗戦で打ちひしがれていた日本人に国の再生・復興への希望をもたらした。1957年4月24日、大任を果たした観測隊員を乗せ、

種子島や筑波の宇宙センターで追跡管制所の所長として後進を主導した後、本社追跡管制部長となり、1986(昭和61)年7月に宇宙開発事業団を退職して三菱電機㈱に入社。本社宇宙・衛星通信事業部技術担当部長を務め、1992(平成4)年、同社を退職した。會田さんは日本の宇宙開発の礎を築いた一人でもある。

會田さんは本学創立の年、1927(昭和2)年の生まれ、84歳。芝浦との関わりは、1940(昭和15)年、東京高等工学校附属工科学校に入学したときから始まる。農家出身の會田さんの父は子どもに高い教育を受けさせたいと強く願った。工作好きだった息子のために学資を工面して工業の学校へ進ませた。入学後、會田さんは電気実習担当の飯野先生の指導よろしきを受けてめきめきと力をつけた。面倒見の良かった先生のお陰で在学中に電気工事の資格も取得した。芝浦高等工学校を卒業して就職した電波研究所では良い上司に恵まれた。後々のことを考え、會田さんを、昼間、芝浦工業専門学校に通わせてくれた。自分の人生はこうした方々のお蔭、會田さんの反芻する思いである。

後々のことを考え、會田さんを、昼間、芝浦工業専門学校に通わせてくれた。自分の人生はこうした方々のお蔭、會田さんの反芻する思いである。

後々のことを考え、會田さんを、昼間、芝浦工業専門学校に通わせてくれた。自分の人生はこうした方々のお蔭、會田さんの反芻する思いである。

同じ釜の飯を食った寮生仲間



芝浦寮玄関

芝浦キャンパスにほど近い所、校舎から歩いて2、3分の至近距離にかつて芝浦工大の学生寮があった。地方出身の学生や運動部員が暮らしていた芝浦寮である。

その寮生の一人、西野保さん(1961年工業化学科卒業)は大阪の高校を卒業。1957(昭和32)年に芝浦工大に入学し、芝浦寮に入って大学生活を始めた。卒業までの4年間を過ごした寮での思い出は半世紀を経た今も色あせないという。

全国各地出身の寮生が寄り集まると話に花が咲いた。北海道の先輩が、「青函連絡船は数えきれないほどのイルカと並走する」と言えば、すかさず九州の先輩が、「関門トンネルから外を見ると、鯛やヒラメが泳いでいる」と切り返し、一同大笑いしたこともあった。先輩に連れられて羽田空港や晴海のモーターショーなどを見学したり、西野さんの好物の甘い物屋をあちこち案内してもらったりしたことも懐かしく思い出されると語る。

当時、芝浦寮にいたのは西野さんが所属したバスケットボール部、そしてスキー部の部員が主体の約30人。1部屋で2～6人が起居を共にした。西野さんの机は、並べたリンゴ箱の上に先輩から譲り受けた座り机をのせたものだった。

大宮キャンパスにも学生寮があった。芝浦工大校友会の鈴見健夫会長(1970年建築学科卒業)は大宮キャンパスが開校した1966(昭和41)年4月に大学に入学。寮生の受け入れ整備が遅れたため、入学の約2カ月後にキャンパスの中にあった大宮学内寮に入った。鈴見さんたちは、キャンパスも寮も、そこで生活した学生としては1期生である。

在寮期間は、鈴見さんたちの頃は1年間だった。寮棟は南、北、中の3つあり、いずれもモルタル2階建て、廊下でつながっていた。1室に2段ベッドが2つ、4人部屋が基本である。多様な個性が同居した。浪人して入学した人たちは同期であっても年上。異年齢の集団生活は高校出たての鈴見さんには新鮮で、変わりから多くを学んだという。

芝浦工大柏中学高校の大村俊樹教諭(1981年機械工学第二学科卒業)は1977(昭和52)年に大学入学。ハンドボール部に入部して大宮キャンパスにあった滴水寮という名の同部の合宿所で暮らし始めた。親元を離れて自炊も経験した。ガスコンロに火を付け、10升は炊ける大釜を使って作ったご飯に焦げができた。それを同じ寮の人たちと一緒に食べたことを懐かしく振り返る。

他にも、大宮には教職員の寮、野球部などの運動部の寮がキャンパス内外に点在した。また、当時、芝浦工大は首都圏のあちこちにアパートなどを借り上げて、地方出身学生の住まい確保に便宜を供していた。それを寮と称した。

大宮学内寮の建物については、1942(昭和17)年、戦時体制下の技術者不足を見込んで千葉に開設、1951(昭和26)年に閉学した東京大学第二工学部の校舎であったという逸話がある。その建物がめぐりめぐって本学で学生寮として再生した。その大宮学内寮も芝浦寮も1985(昭和60)年に廃寮が決まり、解体された。その他の寮も今はない。

2013(平成25)年4月、大宮キャンパスに留学生のための寮、「SITグローバルコモンズ」が開寮する運びになった。日本人学生との交流にも配慮された場である。異なる環境で育まれた多様な個性の交感がわが学園に今再び展開することになる。



1966年、開校時の大宮キャンパス。左上上部矢印の位置が大宮学内寮

奇しくもハイジャック機に 乗り合わせた同窓クルー



朝日新聞(1970年3月31日付夕刊)

北朝鮮のホテルで同室になった副操縦士と航空機関士の2人は、ぼつりぼつりと語り合う中、ともに芝浦工大で学んでいたことを知った。

1970(昭和45)年3月31日、羽田から福岡へ向かう日本航空351便ボーイング727ジェット旅客機「よど号」が9人の赤軍派の若者たちに乗っ取られた。日本で初めてのハイジャック事件だった。搭乗していたのは乗客131人、乗員は機長が石田真二さん、副操縦士が江崎悌一さん、航空機関士が相原利夫さん、他に客室乗務員4人の計7人。

その日、朝7時半過ぎ、操縦室に乱入した犯人たちは相原さんの手足をきつく縛り上げた。「ピョンヤンへ行け!」「ピョンヤン、どこだ?」「北朝鮮の平壤だ」。日本刀を振りかざす犯人たちの顔は真っ青、手がぶるぶる震えていた。操縦席に座る江崎さん自身も足が震えたという。犯人たちの荒ぶる心を鎮めようとして、江崎さんは努めて低い声で話すようにした。度重なる交渉の結果、急きょ乗客の身代わりとなった山村新治郎運輸政務次官とコックピットクルー3人の計4人だけが犯人9人と共に北朝鮮へ飛ぶことになった。

福岡の空港で渡された1枚の地図を江崎さんは今も大切に持っている。「ピョンヤン」、数字やアルファベット、江崎さんの走り書きが生々しい。38度線より北は白紙に等しかった。これだけを頼りに北朝鮮まで飛べというのか、江崎さんは愕然とした。

石田機長は寡黙で昔気質の職人タイプ、江崎さんは沈着にして磊落、相原さんは慎重で几帳面、この三人三様の個性が助け合って、4月3日、飛行機は北朝鮮

に着いた。取り調べを受けて、日本に帰る日はあるのだろうか、江崎さんと相原さんは不安に襲われた。

2人が同じ機に乗り合わせることはそれまでなかった。乗務員はローテーション勤務、2人の組み合わせはよど号が初めてだった。

相原さんは1957(昭和32)年4月に機械工学科に入学、1961年3月に同科を卒業した。電気会社に就職して3年半勤めた後に転職、1964年11月に日本航空に入った。江崎さんは1958年に機械工学科に入学。パイロットの道に進むために1961年3月に退学して航空大学校に入学。1963年4月に日本航空に入社した。

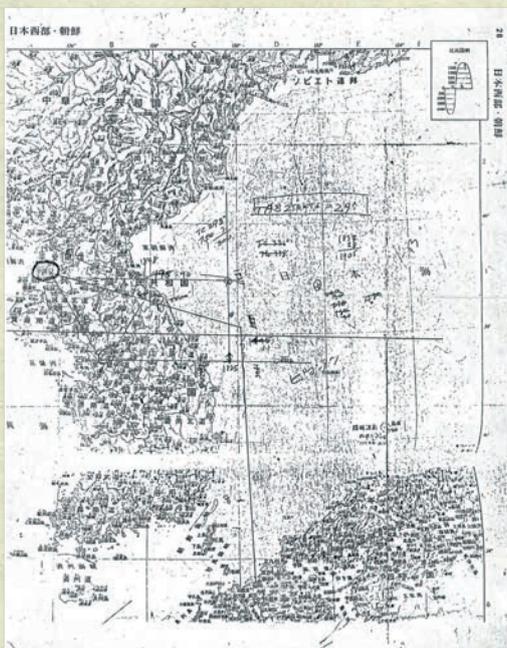
2人に芝浦工大在学当時について話を聞くと、相原さんは厳しかった製図の授業の思い出を挙げた。苦勞して書き上げた図面が真っ赤になって返され、何度も書き直させられたことを懐かしく語った。江崎さんはもともと

機械好き、芝浦工大に入学して拍車がかかった。乗り物全般に興味がある人である。3年間の在学中に12回、実家の福岡に帰省するのに東京から好きなオートバイで行き来したという。

北朝鮮に着いた翌日、帰国の指示が出た。多くの兵士たちが見守る中、再度のフライト前、機体の整備をめぐって相原さんと江崎さんの考えが分かれる場面もあったという。北朝鮮を発ったのは4月5日。離陸した飛行機が地上をべつとりと這っていた濃霧を抜けた途端、嘘のように晴れ渡った青空が眼前に広がった。

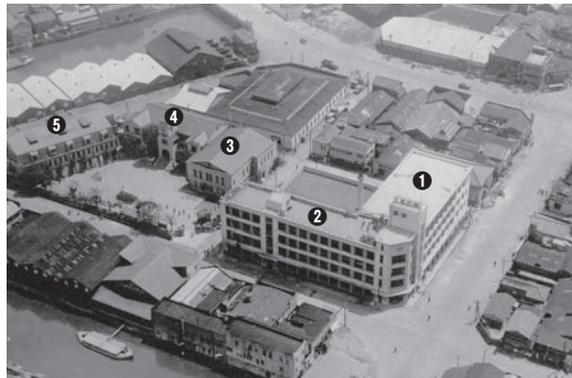
足かけ6日間だった。日本の上空に差し掛かり、機内から富士山が見えた。突如、相原さんに万感こみ上げるものがあった。富士が霞んだ。

42年の歳月を経て、2人は定年退職後の平穏な日々を過ごしている。江崎さんは「工場」と称する自宅の地下で機械工作に熱中。オートバイを始め、あれこれ手掛け、昔とった杵柄の旋盤に溶接に腕を振るっている。無類の機械好きは今も健在である。



福岡の空港で操縦室に届けられた地図

【表紙写真】



1940(昭和15)年ごろの芝浦キャンパス全景

- ①本館(西)
- ②本館(北)
- ③講堂
- ④元アメリカン・スクール・イン・ジャパン校舎
- ⑤東校舎

あとがき

連載開始から5年も経つと、当初と比べて筆致が微妙に変わっている。書かれた事柄も認識に移ろいが生じている。『S.I.T. BULLETIN』の制作をお願いする会社も交代した。「史料に見る芝浦工業大学」のデザインやレイアウトの移り変わりにもそのことが反映されている。

しかし、変わらないものがある。わが学園に集った人たちの営みを、芝浦の歴史を形成した人たちに対する敬愛の念から描く姿勢である。文は時に「芝浦讃歌」ともなっている。2012年3月末に完成、発行した校史『芝浦工業大学の歩み 1927～2011』の随所で「史料に見る芝浦工業大学」から転載に近い引用をしている。編んだ者が重なるが、両者は「歴史は人である」という思いで通底する。

題材は基本的に掲載号の発行月にちなんだものを選んだが、「こういうのがある」と話題を提供してくださる人がいて、それが興味深いものと臨機応変、すぐに採択した。「毎号、楽しみに読んでいます」という言葉をかけてくれた人からは、原稿を書き続ける励みをいただいた。取材に応じ、原稿作成に陰に陽に協力してくださった方々、依頼を承諾し、執筆の労を問わず寄稿してくださった方々、この本は多くの人から頂戴したお力添えの賜物である。心から感謝申し上げます。

(広報課・福川)

史料に見る芝浦工業大学

(『S.I.T. BULLETIN』別冊)

2012年9月7日発行

発行 学校法人芝浦工業大学広報課
〒135-8548 東京都江東区豊洲3-7-5
TEL.03-5859-7070

デザイン 株式会社スペース アド

印刷 光村印刷株式会社
